

藤原拾葉

第拾八輯

302-198

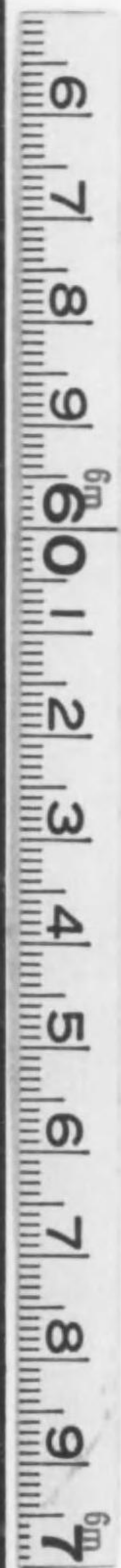


\*1200600061301\*

302

198

信濃奇蹟一覽



始





路  
原  
拾  
葉



Handwritten text in cursive script (草書) enclosed in a rectangular border. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are highly stylized and difficult to decipher precisely, but appear to be a collection of characters or a short inscription.

302  
198

信濃奇區一覽

信奇濃區一覽卷三續

小縣郡之部

四阿山

四阿山は上野の嶺にして此邊の高山也山頭は何方より見ても屋の棟の如し故に四阿と名く此山東は上野南は小縣西は埴科北は高井郡に多くかゝれり眞田より登る峯まで三里半草深くして路なく一丁毎に石祠を立て道のしほりとす中央の岩室に圓形の銅板有長さ七寸ばかり中に立像あり大己貴命の神躰として地主神とす此所より西を望めば屏風岩と云あり徑六七間高さ七八尺褐色にして文理氷裂の如し夫より絶頂に到る二祠あり東は菊理媛命にて上州祠と云西は伊弉册尊を嗣て信州祠と云其回り岩石を積て風を除く此兩祠の央を信上の嶺とす六月十三日諸人登山す此山常に寒氣強き事富士よりも甚し頂上より見渡せば隣國の高山凡十二州にかゝる皆見ゆる中にも子の方に當りて兩山開る所北海を見る烟瀉の中佐渡の山脊にして黛のごとし

國分寺埋木

聖武天皇天平年中諸國に國分寺を立られ一國僧尼の司とす  
建久五年修覆被壞の事東鑑に見えたり

聖武紀曰天平九年詔天下諸國國別令造金光明寺同十一年令造法華寺云  
\*金光明寺ハ國分寺にて國家鎮護寺法華は國分尼寺にて法花滅罪寺也

毎年正月八日より十四日まで最勝經を轉讀す今も正月八日には諸人詣て蘇民將來の守を買これを八日堂といふ是古の遺風也本堂の東に三重の塔あり古造七重塔一區並寫金光西は蓮池也此池往古一宇の有し跡にて堀立造の柱也中六尺の間に一本つゝ焼殘たるあり文化十年の夏當寺主これを見つけて穿出しける長さ四尺許太さ徑一尺余上は黒く燒跡あり下は角に少し丸みつきて朽たる所もなく是を板に掘くに白色桐の如く木理は檜の如く香は杉の如して其邊好事の者乞得て圖繪とし或は簞に作りて愛玩す上田向源寺に類あり香川香樹歌一歌を書前書略

烟にもたら残りたるうもれ木に世々ふる寺のなごりをぞ見る

黃中

將門記承徳三年之古書也承平八年追貞盛條曰率百餘騎之兵火急追征二月廿九日追着於信濃國小縣郡國分寺之邊便帶千阿川彼此合戰間無有勝負厥内彼方上兵他田貞樹中矢而死此方上兵文室好立中矣生也貞盛幸有天命免呂布之誅通隱山中云々右は反

鳴石

前西青色高二尺七寸

文化二年四月上田の西諏訪部村の人々相誘ひ産土神の社地を展るとて千曲河東より石を運びけるが水中にて一箇の奇石を得たり其色青其形三角上鋭下平にし嫩文なし中に坳き所あり形胡蘆の如し其上邊に穴あり穴中法螺の響が如しこれを吹は鳴聲嘖嘖の如く五六丁に聞ゆ里人異石也と云社地に安置し注連を曳て神の如くす其頃遠近傳へ聞へてみる者日々に市の如し今は城中の物となれり

後背周圍六尺三寸



虚空藏山

塩尻の上に虚空藏堂あり別當東福寺山の半腹に又一堂あり絶頂を奥の院と云へとも堂はなく只一株の無名木あり幹は椶の如く葉の芽出る時は藤の如し枝の先に葉出て豆の如き葉一つをむす又此山に秦芹あり葉は毛茛の如く花は烏頭に似たり享保中朝鮮の苗來りてより今諸所にて多く作れども此山には固よりあり又埴科郡の塚に岩跡あり天文廿三年甲州武田家より此岩を襲取多田三八後に淡路守といふを在番としてさし置けるが或夜風雨烈しく物音夥しかりければ庭に出て見る所に何者ともしらず三八が髪をつかみて引揚んとせし所を刀を抜て其手を斬て落したり其物は何方ともなく行方知らず矢にけり彼手は大なる驚の足の如くなる物也とぞ按に是驚なるべし今も其邊に大驚有と云此山嶺き水晶山に驚岩と云岩有數百丈前立する中腹の松木に巢を作りて常にふるよし

匠人 嚙蛇

享保の頃上田房山村に五郎右衛門といふ大工あり城中の第宅修理の時工匠の數に命せられ夏日休息の暇同僚と木枕を拵牽て相戯る五郎右衛門に勝者なく翌日枕を大材に置七八人これに踞り一人五郎右衛門に對してこれを牽に優劣決せず五郎右衛門力を極てこれを牽ば諸者皆横さまに倒れ枕五郎が手にあり是は工等密に謀て釘もて枕を大材に打付たる也諸人拵て其臂の力を稱す又一日休暇私に百間繫に浴して髪を避く五郎深く浴し游泳出没して戯る忽婦地有響て腰脚を曳禁る事あたはず素空手刀又なし故に婦地の首を抱齒を以て首を斫斷壺水盤蓋て紅也工匠等悲愁に堪すといへども惘て更に術なし頃ありて左に蛇の首を握て浮出右手にて海岸に上る顔色常の如し人皆其勇猛を感ぜざるはなく城主にも其勇を賞し給ひて賜も

の有しとなん其より齒を鳴すること僻と也て人と應對談話の間にも齒を鳴せしといへりかくて其年より十七年を経て死せりと云々

或里にて山に入納地を見て逃歸りて病伏終に死したる者あり然るを水中にして納地の首を噴生がたき所を生しは無比の強勇也と人々今に讃歎す

獅子踊

上田の獅子踊は相傳て云古へ此城を築の時人夫等戯れに此踊をなして笛太鼓鉦の拍子にて地固をなしけるが遂に恒例と也今にいたりて毎年祇園會に常田房山の兩村より出て城内の廣庭にて踊る事也其形狀先鳥帽子に天狗の假面をかぶり太刀を佩徑五尺計の團扇を持たるもの一人是を禰宜と云次に獅子三人頭より背

常田獅子踊圖

「ごもんのわきのごんざくらごんがねばながさいたとな  
「たまのすたれなまきあげしまよ  
りさいらをおめにかけましょ  
「まよりきてこれのおにはななか  
むればごもとひらやせみやか  
らかれ  
「しいなげかつけよ  
「しいへもにかつがにいざやおち  
せよ  
「まよりきてこれのおうまやなが  
むればいつもたませぬこまかせ  
んびき  
「まがむれば雨かふるけて雲がた  
つおひとままうしてもとのござ  
くら



まで黒き鶏の尾をさしたるをかぶり腰に五色の幣帛を挟み手の方なる小團扇を持たに黒鶏の尾數多さし紙形打たる物を戴き眼と鼻ばかりの假面をかぶりたる者 目と鼻を縫つてつなぎ後にてしめ又人中の所にひもをつけ口にてくはゆる也昔は泥貝に穴をあけ厚紙にて鼻を造丹土ヲぬりあり 六人手に鉦鐘木を持統て十人各下には裁つけをきる也此外に花笠かぶりびんさゝら持たる子等數多あり是をござらと云又編笠をき太刀をはき青竹に五色の短冊を付たるを持たるあり是を中をどりと云

是は房山獅子の唄也  
ごんざくらば御機ごんがねばな  
は黄金の花「まよりきては参り  
來て「こかねごんざやは黄金の  
小草「しなげかつけよいな木の  
かたけよ 是は昔しなてう木の皮  
のを作りれきの役する者の持た  
る也今は房山の方にて五色の紙  
もて作る

「しいつもにかつかには  
いつまでかたけふのよ  
こなまるなるへしと上  
田の醫生宮下可年いへ  
り  
此に關するは常田の獅  
子也房山の獅子は其出  
立大同小異あり  
唄も常田は小異あり



感馬

孝子は國中に許多有て褒賞にあづかりし者は孝義録に出又もれたるもあり上田領の内は封内孝民傳一卷あり此傳に出る孝子三十六人あり又更級郡今里村の岩女は母に孝を盡して生涯の苦心美談少からずといへどもゆゑありて褒賞にあづからず坂木なる齊掛氏の母也岩女が傳を著す此に孝子をもらすものは枚舉に遑あらず又異行傳一卷有て善行の者八人を載其一に奈良木村に次郎兵衛と云者あり其子を次郎右衛門と稱す父子人と也朴直敦厚にして家内和順し郷里に睦く近鄰の者つひに爭言あるを開事大小となく村長の命する所は畏敬て守て背かず嘗て村長に請て曰毎年秋の租七月の初金を以て上納したしと村長其故をとへば曰公税納めざれば田も吾有にあらざると又同村藤五郎といへる者の田を佃る其租二石一斗刈穫てまさに半なるとき米を田主に輸る田主磨弊のすみやかを問ば曰く私の借を償されば新米先祖に薦がたしいはんや家人敢て管んやといへり農時の隙には薪を馬に駄て上田村に行てひさぐ來往十里鞍を飲て兩手に馬を牽く其物を犯ん事を感て也橋を渡るときは跌ことなかれ墜る事なかれといひ人に遭ときは抵事なかれ冒すことなかれといふ夜寝る時は厩に行馬に向ひて懇寢よと叮嚀親切人と語るが如し或とき驛馬を畜此馬元來驛職て控制を受ず次郎兵衛父子これをつかへば耳を弭れ尾を掉て常の馬に異ならずこれを人に賣るに驛驚る事故に復るといへり素より神佛を崇信して朝夕拜禮す然れども是を以て農事を妨ることなし文化四年六月領主より米を賜て其志を賞し給へりとなん

南唐の陳氏十世同居して宗族七百口 每食 廣 席を設長幼次を以て坐て共に食す畜犬百余あり一牢を共にして食ふ一犬至ざれば諸犬これが爲めに食はず云々こは至誠犬を感ずる也今次郎兵衛父子は至誠馬を感ずると謂ふべし

魚骨石

日向小泉の大日堂は相傳延暦年中坂上の田村丸の建立にて天照山山海堂と號別當は眞言鸞覺山高仙寺此地に蛇河原といふあり山澤の奥より小海堂の麓二丁末をながれ村の中を横きりて浦野川に入る常には水なく暴雨には山々の水落合て川と也小石多く流出此石黒色にして板の如く薄く片たる間に蜈蚣の狀あり土人むかで石と名づく熟々見るに蜈蚣にあらず魚骨の跡也謠に上古岩端に水たゝえて此邊はうみなりしといふたま〜貝を含むものあり

出浦

別所は原出浦の郷といふ觀音堂の有地を院内とて温泉四所に在樂師堂の有地を大陽とて温泉三箇あり院内と云は往古長樂安樂常樂の三寺ありしを後天變に燒失して名のみ傳へしとかや寺記に言天長四年又三樂寺を再建し清和帝の御宇勅上蓮華明星四尊の四院を造立して三樂寺の別院となし八角四重の浮屠を經營す又安和の頃平惟茂諸堂再建有しを木會義仲の時梵關兵火餘殃に灰燼となるといへり其後北條相摸守貞時執權の頃常樂寺堅者性算を北向堂中興とし安樂寺を再建して樞谷禪師を臨濟禪門の開祖とす

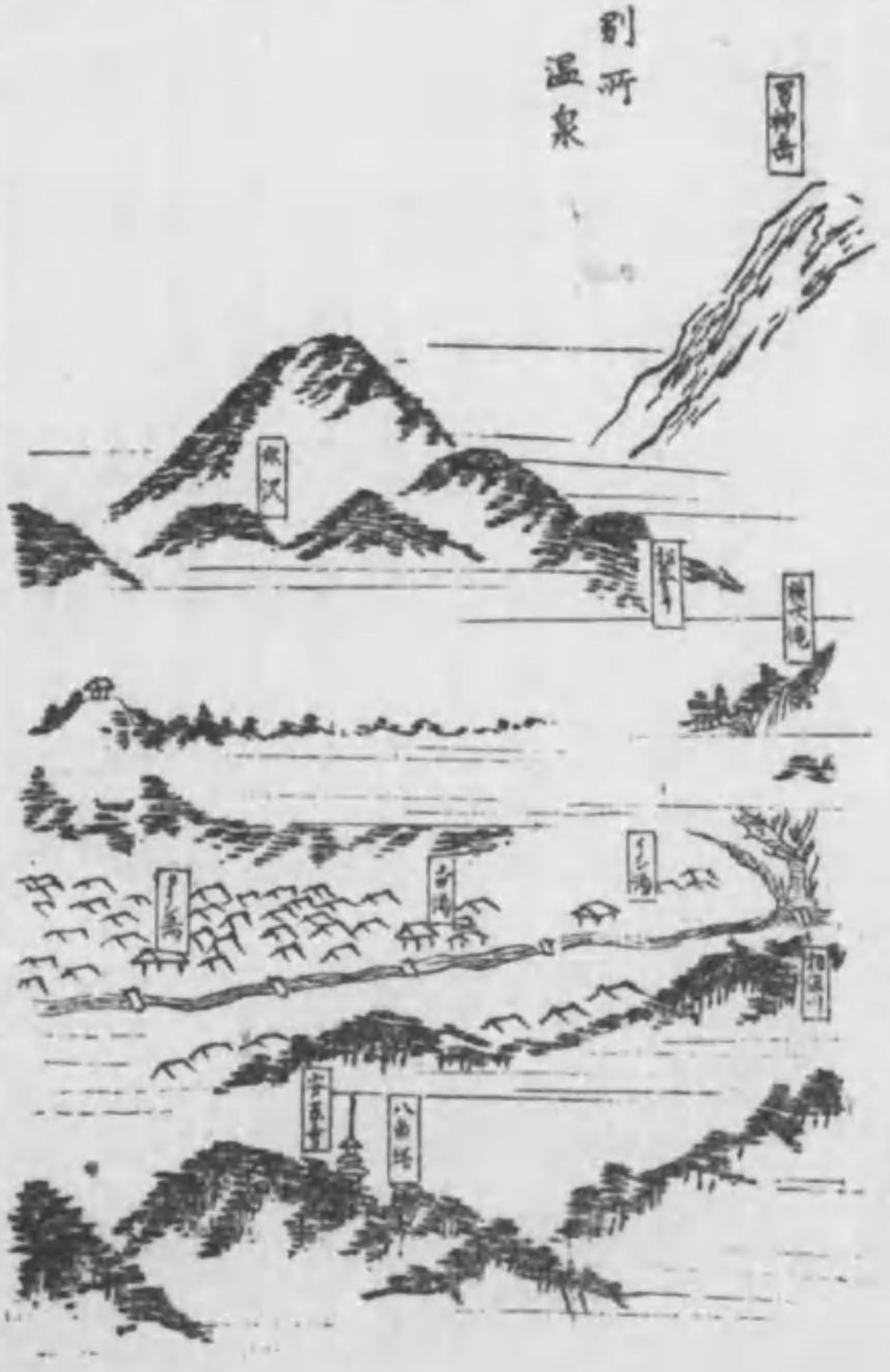
常樂寺は天台宗長樂寺は廢す云々



禪林僧寶傳曰安樂寺推谷仙師師名は惟仙號は樵谷未詳何許人志趣超邁嘗航海南游得法於天童別山智和尚歸住信州安樂寺爲開山第一祖云々

祖師堂は八角塔の北に在木像の胎中に八句の陀羅尼をしるし嘉曆四己巳九月十二日造之と有大水の頃觀變和尚より曹洞宗となる

塔は境内山林の中腹に有建立時代詳ならずといへども境内に護摩堂摩堂といふ所もあれば樵谷禪師の再建より以前の物なるべし黒漆を以て塗る今所々に少しばかり黒色のこるのみ  
男神岳は伊弉諾尊女神岳は伊弉册尊を祭る此二山より流れ出る水の尾合川を相染川と呼兩岳の神祠峯をへだつれば是を合せ祭りて此川の邊に一祠を造り結神祠と名づく此神木に椋の木ありこれを美欄樹と呼ひ男女枝に紙



別所  
温泉

を結びて妹背結びを願ふ椋と舞の音の通ふゆふなるべし美らんじゆないふも美の宇のみにかいはりていへるなるべしへ

一年洪水に結神祠神木ともに流れて下にいたり留る地に息角樹あり又其所に紙を結びて今は其色角樹を美欄樹といふ春雨抄  
ま那のなる相染川のはたにこそすくせ結びの神はましませ  
よみ人まらず

氷澤は三冬暖氣にして雪氷なく夏土用に至りて氷あり故に氷澤といふ西行戻橋は昔西行此所に

來り兒童に向ひ戯れに菱畑をさして是は何ぞと問けるを冬童たちの夏かれ草也と答へければいかゞ思ひけん此橋より戻りしといひ傳へり仁子田時西行の笠懸松といふあり惟茂塚と云は九重の名塔也其下に家臣金剛兵衛利綱と云者の墓あり惟茂の墓は越後清原郡岩村平等寺に有と云此所の塔は家臣の立るなるべし





此地の外にも當郡は温泉多し一鹿牧湯 高梨村 一鹽泉寺湯 平井村 一田澤湯内湯 一香掛湯 一小倉湯 いは倉の奥

五十年前までは麻布にて包たる所いさゝかのこりてみえたりといふ屋の下組もの四手さきにして其工町碑なる事又たらびなき遺物也

### 安樂寺 八稜四層之塔

或曰北條義時の三男陸奥守平重時の三男北條武藏守義政建治二年落髮して信州に閑居す世に塩田殿と號せしは此義政の餘澤などにや未詳



### 鴻の巢

下の郷の分邑ゲンボウと云地の奥松山の中に鴻の巢と云所あり一體登へて其土色すべて白く五色間色さまぐの小石を雜へ出す草木生育せず險峻にして飛鳥の外生類登る事あたはず昔此山に鴻の巢くひしより名づくると云傳ふ風雨毎に土石流れ落て山の形變易せり故に此邊より此谷の下流れに至て皆此石也其肌潤滑にして光彩あたかも玉の如し中にも小にして白色なるは奥津輕の舍利石に似たり黄赤色を帶たる礪石に類す又清潔透徹して水晶に比すべきも有れ小にして大なるも寸に充るは稀也 筑前夏井の礪石に類す實に信中の崑山合浦ともいふべし

### 佛岩

大門峠より半里下りて東に佛岩と云有岩石數々並ひたり文政十年十月の頃岩茸をとるもの一ツの岩に登りみれば五輪の如き石崩れて有里人に語りければ人々其地に至りみるに何方よりも登る事あたはず十間許登りて平岩ありこゝにて又十間許の木二本を立掛足がりを結び漸く頂に登れば上平にして笠石臺石有しを採重ねたりと云いかなる工もてかゝる所に立けん

西肥前大寺淨河原院  
北息女日光峯宮  
東近江禪閣  
前



柳 草

和田嶺に柳草と云ふあり葉は柳の如く莖の高さ四五尺肥たるは六七尺數莖直立して莖の末に花を著す花は五瓣にて梅花の如く淡紅紫色夏末より發初め秋初めに至る初め幹にのみ花さき後には枝を生し枝毎に花を咲く其花美觀群卉に冠たり花の後實を結ぶ實は菜角の角の如し此艸の類にて下品なるものは諸國にも有といへども如此大に花の美觀なるはなし故に都下の花戸本州に来る時は根を求てん事を欲す此花和田峠のみに限らず諸山にあり

一説には救荒本草に出たる柳葉菜の一種なるべし



信濃奇區一覽 卷三終

信濃奇區一覽卷之四目錄

|       |      |         |     |
|-------|------|---------|-----|
| 諏訪郡之部 | 須波之海 | 上下神社    | 御頭祭 |
| 御射山祭  | 御柱祭  | 神寶並級笠行勝 |     |
| 七木七石  | 七不思議 | 下諏方祭    |     |
| 縁起繪   | 齋免   | 石羊      |     |
| 山神獅子  | 徳本釜  | 人角      |     |
| 有賀山火  |      |         |     |
| 伊那郡之部 |      |         |     |
| 天狗栗   | 馬角   | 勝間山仙境   |     |
| 眞菰池   | 風穴   | 鸚鵡石     |     |
| 鹿嶋    | 大河原  | 松島王墓    |     |
| 竹魚    | 駒岳   | 光前寺     |     |
| 大島山瀧  | 三足鶏  | 關龍      |     |
| 雲彩寺古物 | 銅版   | 冠石      |     |

|     |     |     |     |      |
|-----|-----|-----|-----|------|
| 早梅花 | 立石類 | 春田打 | 神代石 | 山吹崎人 |
|     | 大根石 | 白山窟 | 國原  |      |
|     |     |     | 深見池 |      |

### 信濃奇區一覽 卷之四

#### 諏訪郡之部

#### 須波乃海

日本記元正天皇養老五年六月信濃國を割て始て諏訪の國を置聖武天皇神龜元年配流の遠近を定め玉ふに諏方國伊豫國を中流とす其後天平三年廢諏方國併信濃國云々湖水の順道三里とはいへとも洪水の毎度に埋りて七島の名のみ残りてみな陸地となれり今は經一里或は一里半深さ七尋ばかり西に至りては深さ勝りて幾ばくといふ事をしらす魚鱗は鯉鱗鯪鰻鱒魚鱒魚あり近年小海老を産すめぐりに浦々ありて民家多し漁父常にすなとりをなして生計の便とす南は駿河なる不二の高根を遙に望み四方に衆山連綿して風色斜ならす此水の落口を尾尻といふ伊那郡を流れて遠州へ出る天龍川の水上也冬は湖一面に氷はりふさきて其上を人通行す春は正月の末又年の寒温に也て二月の半までも氷の上をゆきす氷の厚さ尺より二尺餘其上を何程の大木大石を引けとも破る事なし氷の上へる故に標をはきて通る其上に雪積れは常の如く草履草鞋にて行馬はすへる故渡らす此湖水はりて漁人氷の下に網を引を氷引といふ氷を一所長くうがちて其處より網を入又其先をうかち竹の竿を持って次第に先のうちちたる方まであみを送りやりて幾所もかくの如くにかちて網を廣くはりて魚をとる此時漁人は腰に長き竿を狭む若あやまりて落入るときは竿にて死をまぬかるゝといへり昔はかくすることを知らずして冬春は

漁人すなとりをせずといへり  
此湖を騒人驚湖と稱す三體詩に驚湖山下稻梁肥注に驚湖は在信州 鉦山縣西南十五里とあるをもて信州の大湖なれ  
はなすらへていふ也

或本朝年代記云後深草院建  
長二年二月十四日諏訪神前湖  
大島又唐船出現片時間消失  
云々是は西國北國にて蟹氣樓  
をみると云類なるへし

復波湖

あつちあつち  
あつちあつち

あつちあつち

あつちあつち

あつちあつち

あつちあつち

あつちあつち



諏訪上下神社

湖水涵虛湖  
鏡中浮万象  
波底那峯集  
總入漢人網  
秋萬卷  
群山環抱儼成  
欄中貯平湖  
鏡清若看芙蓉  
涵影天然玉  
女洗頭盆  
秋六如



信濃國一宮諏訪大明神延喜式神名帳南方刀美神社名神大 二座日本記持統天皇五年八月遣使者祭信濃國須波水内等神  
云々此時始て勅使にて祭禮有仁明天皇承和九年建御名方富命前八坂刀賣命とともに授位の事あり

文德清和の兩朝嘉祥貞觀の間兩神ともに從一位正二位を累叙ありし事文德實錄三代實錄にみへたり  
奈良院天文二十二年御宸筆を賜て御方正一位南宮法性大明神と勅諭有延曆二十年坂上田村丸詔を奉て東夷征伐の時  
東山道を経て當社に冥福を冀神馬を奉る神驗ありて朝廷より田野千町納稻八萬四千束を供して祭祀の具に充しめ給ふ

普賢堂 正應五年再興施主知 鐘 樓 普賢堂の前にあり 鐘は永仁四年に鑄る

五層塔 延慶元年建立九輪迄二十七 間九輪治工甲斐國志太法道 建武四年九月十七日立鎌倉より兩角丹後奉行として來る

上諏方社大祝諏方氏は當社の神胤也 直指抄ニ云秘説ニ曰諏訪明神の子孫也以上葉造抄ニ説也 平城天皇の御子女子有て男子なし於茲桓  
武の皇胤有員下向有て大祝の婿養子と也社務職たり是を御表衣祝といふ大明神有員に説て宜く吾に體なし祝を以て體と  
す云々 因茲大祝代々神職相續の時難冠社に於て傳記作法を以て立烏帽子趨座の狩衣裳の指貫を着し明神の正體と稱す大  
祝職の内は常に夏鹿毛の褥に坐し死穢の服を受す住宅を以て神殿と號す又諏訪郡の外に出す若大祝職のうちに卒する事あ  
れば先神前へ移して不明門より出す此時に至り初て卒去の披露す

五官 神長官 守矢氏 禰宜大夫 守矢氏 權祝 矢鳥氏 擬祝 伊藤氏 副祝 長坂氏 兩奉行 矢鳥氏 御劔持 宮島氏 花岡氏

社僧 普賢堂別當僧官宗 神變山神宮寺 同宗 秘密山如法院 添て神長官と云森山に守屋の靈を祀り今守屋の岳といふ弟君より當神長官まで四十八代云々

同宗 七島山蓮池院 臨濟宗 妙心寺末 鷲峯山法華寺

御頭祭

三月四日日本社より十八丁を隔て前宮に十間廊あり 往古は鹿狩の實檢也と 云今俗に十間堂といふ 上段に一百餘の燈籠を挑猪鹿の頭七十五 組に  
のせて供ふ 組は松板を二つを切 鬘講の暗は郡中國中にて十六ヶ村を頭村と定め十六年に一度つゝ祭事を勤む其年の頭村  
より十五歳以下の童男一人を神使と號て出す 古は六人也第一には伊奈より出る二人を外縣外縣宮付と云二には諏方より出 三十  
日潔齋させ水干に刺袴細立烏帽子を着て給仕す流鏑馬あり此祭は往古鹿狩の還りを表はし故に夜祭也一の炬火は一番手の  
歸りを知らせぬる爲也二の炬火は二番手三の炬火にて終る今は其形はかり也又長七尺の柱に流鏑馬の矢二本を結付四木  
じしやの木 辛夷柳 枝葉を取添玄米に麴を合せねり堅めたるを清酒と 又柏 云て櫛の葉に包申にさして柱にさす是を御卯杖又御杖  
柱と云此柱を飾立て神使の驅騎あり藤皮を纏としはんひとて腰に二丈三尺の麻布を付神原を乗回す此時參詣の群衆聲を揚  
て騒くを御手拂とて祭の終とす此祭様々の式あり俗に御廻搦と云  
新葉 あらたまる須波の祭のみかり人しかもありけり神のちかひは 宗良親王

御射山祭

本社より三里を隔辰巳に當て穂野といへる地に御射山の社あり七月廿四日青莖にて數十軒の假屋を造り廿六日大祝八角  
の級笠藪葉藍摺の直垂菅の行勝を着し騎馬を粧五官兩奉行従ひて御射山にいたる黄衣の神人白旗二本を持青莖藪の神殿の  
左右に立廿七日午刻毛髮 禪堂廻を以て奉幣あり斯時日月星の三光を望茶店賣物を出して町屋の如し相撲あり近郷の士民

群集せり三日三夜を歴て祭終り假座を取拂ひもとの原となる  
玉葉  
をはなふくほやのめくりの一むらにしはし里あり秋のみさやま

金刺盛久

御柱祭

寅申の年七年に一度寅申の日本社より五里を隔て御小屋が嵩に登る袖人潔齋して四丈八尺より五丈餘の丸木八本を伐る是  
を御柱となつく三月寅申の日神川原に拽出し四月寅申の日社頭へひく鐵砲二十挺弓十張鎗廿本郡主より出る騎馬多し大祝  
は馬上雨天の節 八角二蓋の鎧等を着五官其外各騎馬にて此騎馬の前へ同朋一人素襦を着大太刀をはき白布の抹額をしめ  
木作の大肩尖刀を荷て立これを力士と名づく大祝の力士は柄長き大ひしやうなかく 郡主の騎馬は十二三の小童也次に高遠の騎馬警衛して  
御柱二本本社に立二本は前宮に立翌日四本兩社に立但高遠の人夫は初日本一本次に一本立是を御柱祭といふ近國より參詣  
の群衆夥し

此年萱葺の寶殿一方を改造り六月寅申日神寶を新殿に遷す神輿の上覆黃純の錦七年に一枚づゝ掛る故に厚さ尺を重ねて  
は切て落る其上に常の錦を覆ひ五官寺奉行これをかき社僧の輩傍にて法事を勤む以外年中神事數多し

七種神寶 八葉鈴 眞澄鏡 根曲寶劍 御寶鈴 三組一組 御寶印 以上其外神寶數多し

此寶鏡は寛政十一年の春山本の郷民三郎兵衛といへる者の子八十五郎同友徳重ともにも薪を採り守屋の岳に登る半途にし  
て懸踏の傍に光輝の物あり怪しみて録を以て土を穿ければ一箇の鏡を得たり徑八寸餘厚さ五分固廻八葉光輝人を照す家に  
もち歸り父に語り邑長に謀村長官吏に訴ふ官吏措すして諏方侯に上る侯褒賞して八十五郎に米を賜ふ侯人をして是を或何

某に鑑定を請玉へは是千年外の物蓋鳳馬鏡

徑八寸五分  
重五合

也と又肥州の唐津侯に話玉へば唐津侯長崎の有  
士に命して譯士を以て異城の人に視せ給ふ清人  
熟視て曰鳳馬鏡に非す背に麒麟鳳凰の鑄形あ  
り銅色粹美也是漢代の菱花鏡也嘗聞魏武帝豫と  
して是を藏すと今を距る千三百餘年偶日本に  
來り此珍品を觀る事を得たりと感歎せしとそ今  
上諏方の神庫に藏る

古鏡の圖



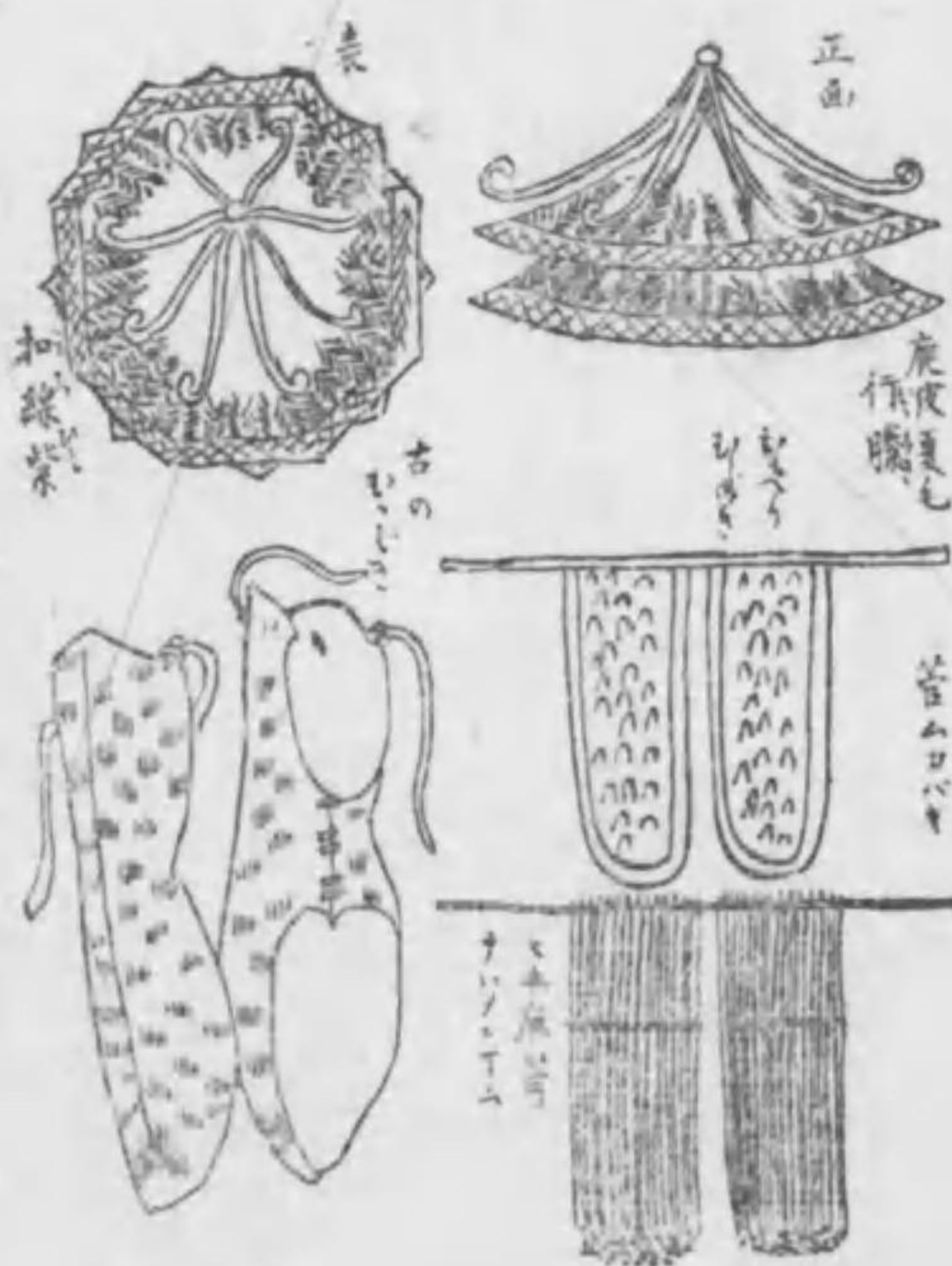
副祝長坂純明翁之記曰天正十年三月織田右府  
欲滅之武田氏而師十萬餘騎而屯當郡  
此時當社罹干兵燹神社寶藏悉爲灰燼也於  
是巫之輩荷神輿負財寶運送于守屋岳山中險路而墜之竟失其所在二百餘年湮沒者乎不  
然樵路危險何故在于此  
焉哉云々

- 七 峠 杖突峠 有賀峠 三澤峠 四谷峠 餅屋峠 大門峠 萬木口 甲州
- 七 島 宮島 藤島 高島 浮島 福島 白狐島 飯島 神宮
- 七 石 御坐石 御香石 墓石 小袋石 小玉石 御祝石 龜石 宮川

八角二蓋笠笠又轉笠と云  
縁五色錦白糸にて十文字をかけ  
るあじろ八角に粗徑一尺二寸許  
しなの木あいの皮厚々五リン巾  
五分

八角へ一節ッ、幅五分許厚一分  
五色錦にて巻二枚の間は輪曲も  
の高一寸徑八寸白木

物柱登御射山祭の節大祝着用



七 木 櫻稱木栗澤 櫻稱木 野村 峯稱木高郡村 火燒山 檜稱木 村 神原 松稱木神原 檜稱木 村 實内 柳稱木矢刀 鳥村 右四七の  
數に七種の神寶七考七奇を加へて四十九不思議と云是は七々の數を云のみすへて奇とするには非ず新著聞集に七  
木七石を載す誤多し地名考木會路名所圖繪に七奇を誤る  
河合弘淵の漫錄に七のたゝへの木といふは今に至りて寶倉に有るもあり又所さだかならざるもあり上れる世には名たゝ

る御神の宮のみ千木の高しりて坐つれとも小祠はいとくすくなくかりしとかや藪に注運ゆひ木に幣すへ或は形異なる  
石の面に忌登ひうかをすへ置て齋場とし神に稱辭まふしおろがみけるゆへたゝへ木とはいふなるべし己或とき室内とい  
ふ所の椽たゝへといふ所に往くに傍に瓦器島と云處ありて古き陶の缺たるが多にあり是をもてみれば諸の木の本に供物  
へほさき神祭せし跡なるべし云々

七 不 思 議

湖水神幸 湖の上に冬始て氷はりて第三日或は四五日の頃上の須波より下の諏方のかたに横幅五尺ばかり一夜に  
へて神下の宮へ渡玉ふとて是を御渡といふ又神幸ともいへり此御渡有つて後に人わたる御渡なき内は渡らず年によりて御  
渡のかはる上の諏方よりある事はかはりなく其所によりて年の豊凶を卜知す 下は大和の寶より南宮明神の邊まで吉也  
元旦蛙獵 御手洗川中冬の頃より凍とちて白布を鋪か如し正月朝日の朝有司斧或を以て堅凍を碎は蟻蟻雨いつるこれを  
二つ捕て神前において小弓を以て是を射て牲と號て備ふる事往古より毎歳不闕の奇端也 御手洗川は神前に瀧也有 五穀  
筒粥 正月十四日社中に於て五穀を藪筒を釜に入粥を煮て熟する時其筒中へ入たる穀物の多少にも其年の五穀登の減否を  
占ひ知る事也天正後廢 高野原之耳割 三月丙の日祭禮前宮十間廊におゐて修行あり神酒七十五樽一斗 猪鹿頭七十五穀  
に備此頭は年中諸方の獵師とり得る所の頭を獻す若數不足の時は魚鳥の頭を添其中に年々必耳割の鹿頭あり 高野は前宮  
御作田 六月晦日藤嶋の社にて職掌の者舞樂を奏し苗を神田に植る既に三十日を歷て登八月一日これを放て神供に備る也  
天正 葛井清池 大宮より二十餘丁を隔て寅卯の間に葛井社に池あり其深きこと測しられず木葉池に落て浮ぶ十二月晦  
後廢

日社人供物を器に入れ底に沈めて祭る也速に遠州鎌田池に出現すと云傳ふ又葛井の池の魚はみな片眼也とそ 同寶殿點滴  
 年中ある茅葺の寶殿の檐より雫のしたりありこれを社頭の雨といふ此下に天流の井あり是を天龍川の起源といふ  
 七考神祕此外塔の影畔一重にして蛙の聲有無の事等七奇にあらず社頭古は山本の郷也後醍醐天皇正中元年改て神宮寺村と  
 云社領千石下諏訪は社領五百石本社健南方命相殿に兄弟事代主命を合せ祭る社頭の奥に父神三輪の神を祭れとも社はなし  
 具祭式のみ也本社二ヶ所和田領へかゝる所の社を 春社といひ上諏訪への往還湯の町の南に有を秋社と云ふ正月元日子の  
 刻神輿を秋社より春社へ遷す大祝五官騎馬を装ひ俗人法樂を奏して供養す七月一日春社より秋社へ遷す元日の如し餅十二  
 本なき餅數百本糠數十本鞍馬數疋弓鐵砲等は郡主より出る此日は御船祭とて青葉をもて船の形を作り事代主命の像とて夫  
 婦二神の像をかりに作りて上に立數百人裸躰にてこれをかき三度社地を廻りて秋社に至る其いかめしく 惡事いふはかり  
 なし

神功皇后三韓征伐の時當社と住吉との御神を御船に祭りければ海上無難に御軍勝利し玉へりとて御舟祭りは有ける文化  
 十年出羽國庄内もの四五人船出せしに暴風吹起り船もすてに打碎しかとも當社を祈念して波のまに／＼漂ひしに荒和  
 布の多く生繁りたる上に至り一日二日浮み居たり稍風もしつまりて漁の舟に助けられ皆恙なく上陸しければやかて其  
 あらめを刈とりもて 賽しに遙々來り當社へ獻せし事あり  
 七月の御射山祭は本社より三十町餘山中に假屋を造り薄尾花をさかふきて廿六日詣て祭禮修行し廿九日下山する事總て上  
 諏訪と同じ最古雅なる事ともにて世類ひなき神事也 古は三里山中に入る今も其地に至ればたま／＼古蹟 御柱祭は寅申の年  
 正月十七日春社より十町餘七五三山に登り注連を曳是を山口祭と云同二十三山中二十町斧立社の神酒を供へ柚人潔齋し

て八本の柱を伐かへて兩社を葺替て四月寅申の日七日前の夜數百の燈籠を掛庭燎を設寅の刻に至り火を滅し神體を新社に  
 遷す翌日八本の柱を曳寅申の日四本春社に立七日過て四本秋社に立る也

鐵印全圖

下諏方子傳り青神  
 祝印ハ平城天皇より  
 下ニ賜リ鐵印アリ  
 賣神ハ坂ノ音命  
 あり



鐵 赤銅  
 上ハ蓋 下ハ肉也



絶切光太刀

元暦元年依水  
 高綱宇治川先陣  
 の府以太刀を以て  
 此の絶切神印ハ  
 一ツあり絶切光し  
 蘇子後宮社奉  
 納一ツ之當の太  
 刀の如切神印ハ  
 皮夾へ全是赤銅  
 無地鍔ハ銅ハ  
 皮ハ赤銅ハ  
 色ハ三枚合へ



中身二尺  
 四寸五分  
 銘云  
 絶切光作  
 備中國者江  
 住五三口神安  
 ト手有末ハ  
 貞次入大治  
 ノ頃の略ニ

下諏方大祝金刺氏は神姓なりしが欽明天皇の皇子金刺王社務職たりしより金刺を姓とす後醍醐天皇の御宇中絶今は 武原親氏族の



内十五歳 童男を大祝とす十五才の後は替る也

以下の 五 官 武居祝今井氏 禰宜大夫 桃井氏 權祝吉田氏 擬祝山田氏 副祝山田氏 其外 若宮祝今井氏 宮津子祝上原氏

檢校大夫 小萩祝 宮島祝 天王祝 略

社僧 秋宮神宮寺 觀音堂三層塔有 春宮 觀照寺 藥師堂有 養會樂師と云

右寺は何れも眞言宗にて弘法大師の開基と云空海の筆經文一卷黃絹の袈裟一箇武居祝家に傳て有

當社にも七不思議と稱するあり

御渡上 八榮鈴 當社神寶の 御作田 神田六月晦日稻を順八月一日神供に備御 浮島社 此所御手洗川左右分て上古より水

根入杉 根八方に蔓て高く榮 御射山 毎歲七月廿七日祭禮千の割日月屋と 湯口清濁 下諏訪町綿の湯此温泉當社神寶によつ

者入湯するときは 湯口濁るといふ 湯口清濁 下諏訪町綿の湯此温泉當社神寶によつ

いかにも背の高き男といかにも背の底き男と打つれて行あり大男いひけるやう世に小男ほどあぢきなきものはあらしかし既に曼子か智にあらずは釣門の恥かしめをかふるへく義經の勇にあらずは千金の弓をむむなもともるへし三尺の太刀五尺のきぬ 南留別志に古に三尺の劍 一身のかざり嚴ならずたま／＼鳥羽僧正のものくらべにあひて鼻あふきの高名は得たりとも添臥の隠所喫あてたるうたても語ならずや駕籠かきの肩遠ひ川越しにはふつゝかなるまして和ぬしのことき小順禮におけるや親の日にと喰ひたる報ひとそ是非なけれとあさみ／＼行此小男腹あしけれど大山伏にいひなみされておづ／＼伴ひ行ほどにやかて諏訪のワキ湯に至りぬ黄昏時の入こみかれよこれよと込あふ中にはやかの脊高かきぬ湯壺のうちにはたと取落しぬ伊せをの疊のぬれ衣もほすにかいなき大男か脇のはらきのみ小男かこゝろには小氣味よ

くてやありけんさらは衣ひとつ貸し給へといへどさきの悪手口をあさわらひていかな／＼かさす夜風肌へにむはりしてあまりのかなしさに手を摺て詫けるにぞさすかにさき織一つぬきて貸す千鳥のころも雀の赤脛にゆきたけあはねと丸裸ならんよりはと喜ひあへりしとなん

是を誹語の附句に

ひさし 前句 入込し諏訪のわき湯

のゆふまくれ 曲水

なかにも脊のたかき山伏し

はせを

下諏方

田御射山園

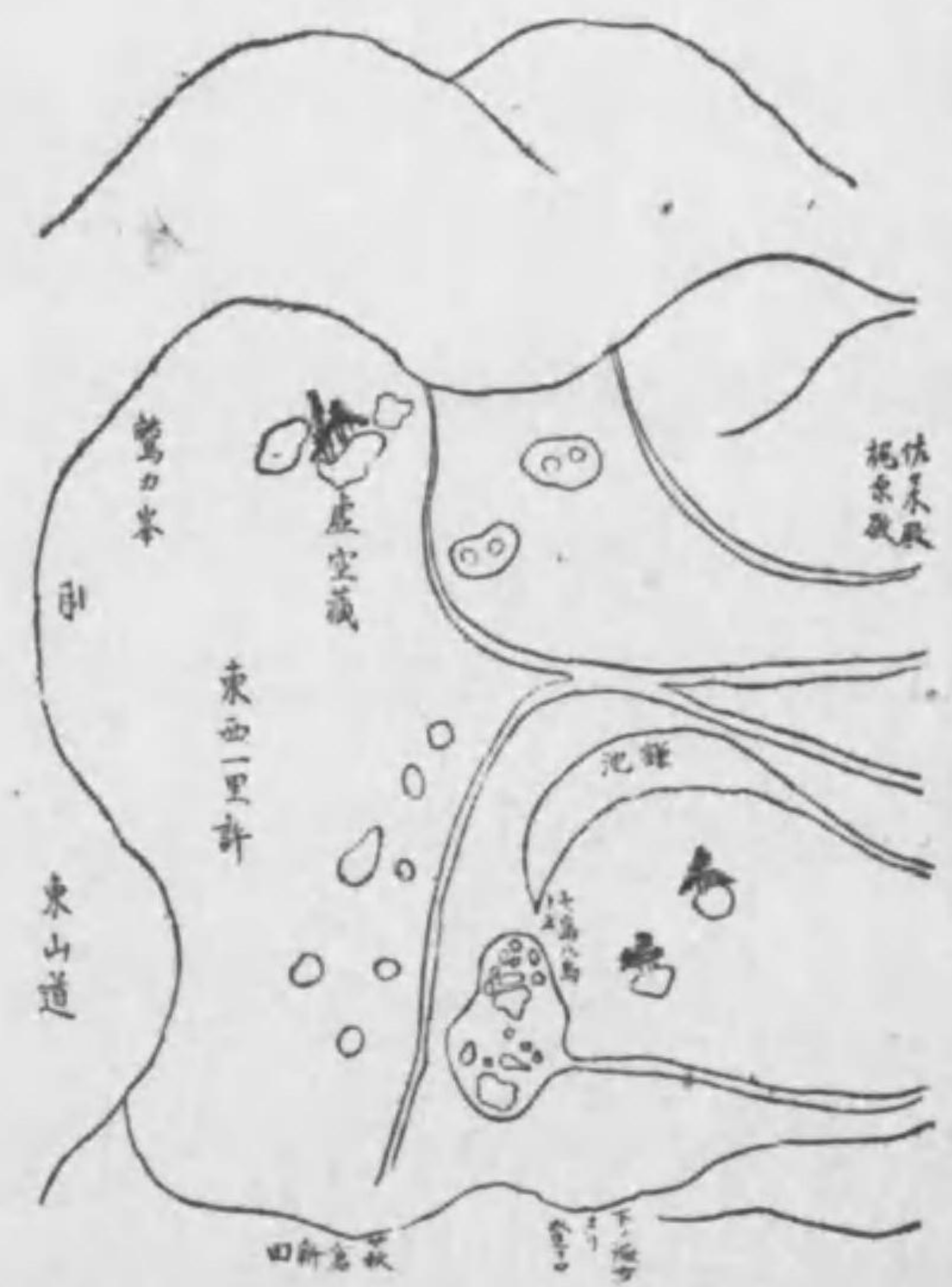
武居祝家

藤木堂



縁起繪

諏訪の縁起繪の事は古くより聞へて中原の康富か日記にも書たる事宣長かたまたか都方にみへたり嘉吉二年の記に云同十一月廿六日参伏見殿候宮御方御讀大御所有御出座及御雜談諏訪縁起繪事有次申上候處未レ被レ御覽之繪也致媒介可借進之由被レ仰畢可申試之由申上云々同十一月一日諏訪縁起之繪十二可借進之由自伏見殿被レ御覽方將監候間其



由予令傳仰今日持來之間即同道参伏見殿件縁起幸權借進上之庭田少將被取繼之被悅思食之由有仰金覆輪一振被下諏方□□件縁起外題後光嚴院被遊之等持院殿每奥被載御名字者也予去夏比於伊勢兵庫助拜見云々  
 後光嚴院人皇九十九代等持院足利尊氏之謚也此縁起繪失所在一年浪草に曰此祭に遠笠懸を射て追らす也其始は田村鷹將軍の安倍高麗を伐んために信濃國に至り此神に祈り申されしに梶の葉の紋付し直垂着たる人湖の波間を趨せて笠懸射たりしそ彼御神の現し給ふ如く也とそ此後龜波とも記て諏方とよめりと被縁起にあり云々



元文中神宮寺村竹居と云所より穿出ス古代の神酒の器也今權  
 祝矢鳥家に藏す

石  
 羊

矢ヶ崎村の北に永明寺山とて高く峙たる松山あり此山南西の中腹に谷ありて大なる岩石數百竈々たり其石間に洞をなし穴をなす所多し其下滴水小流をなすこの内に異獸ありて住り大さ鹿の如く毛色も又鹿の如し中に黒白の斑あり頭は小し惣身毛長く垂て四足を隠す常に出る事稀也炎夏暴雨の後は出て蚯蚓を穿る如し村里近しといへとも見る者少したま〜見し者名つけて石羊と云又毛長猪被格なと名つく群をなすといへとも其數二十余に過すといへり其里の醫人河合正阿父子作なひて蓑蓑を穿に極き三十



余性年正阿  
 訪ア觀シク  
 文セリ合息  
 ニ醫ヲ業トセ

間はかりを隔て見たるよし此圖正阿か見しと云状をもて此に寫す

### 山神の獨子

八ヶ嶽の麓楓の木新田の上老木の控の中に小獸ありて住これを名つけて山の神の獨子といふ鼠より大きく猫の子の如く跳の如くにして尾短く脚も矮く冬月霜の降頃出る踏捷にして善走るか故に其形狀審に見る事あたはず毛色最うるはしく淡白淡黄或は黒白の駁あり  
木會にて山神のオヤコと云ものこれに同じ安曇郡にいふ貂鼠の類なるべし

### 徳本 釜

東堀村に名醫徳本の墓あり此人族姓は長田氏乾室と號し又知足齋と號し一草庵を結ひて茅菴と號す永正の末に生れ其産する所詳ならず或甲斐といひ信濃といひ美濃といひ三河といふ各會てより所なし東堀にては肥前産といへり専ら醫を業とし甲斐に在ては富士に躋て藥を採信濃に在ては木曾山中に入て藥を採みつから一家をなしてよく沈痾廢疾といへとも手にしたかつて愈さる事なし曾羅山林先生道の家に在先生幼にして翁に讀書をさつかる常に藥囊を頸に掛て四方に周遊し名利を求す藥をうりて價を得る事一服十八錢に過す文祿慶長より元和の間専ら行はる久しく甲斐國にあそふ故に世に甲斐の徳本と呼ぶ或時高貴の御方御病ありて召れしに藥を調献し率り速に功驗ありて厚く賞を賜るべしとありしかとも更に辭して受す例の十八錢のつもり請得て去りぬ其後屢々命有て恩賞の沙汰ありければ友人に家なきを患ふる者あり此ものに家を賜るへし猶吾に賜るにひとしといふ即甲斐國山梨郡今井村にて六町四面の地に金を添て賜りぬ即其者を呼て與ふ彼地今に徳本

屋敷といひ傳ふるとそ又或時乞丐の病ありて藥を請しに十八錢有や問無と答ければ汝我か藥を飲事あたはず命也死へしといひしとなん下諏訪東堀村に來てとまる事年あり御子柴氏の女を娶て一男あり寛永七年庚午二月十四日病なくして終る壽百十八歳といへり一男は交名長田孫兵衛といひしより父子の墳墓今猶東堀村の南 徳本所持釜

長六寸三分  
徑一尺  
蓋六寸



碑面乾室徳本庵主  
梅花無盡藏と云書有て此新か作と云或は擬書なりと云又奇方十九方と云有

### 伊那郡之部

#### 天 狗 栗

伊那郡は諏訪郡の堺より遠江三河の國分界に至て三十里に余り一郡上中下とわかちて寒暖も又ひとしからず天龍河南に流れて土地下るゆゑにや中伊那より下に至りては暖氣稍まさりて他郡に育せざる草木多し又土地によりて木生の變する物あり茲に諏訪の三澤より小野へ越る嶺を三澤峠と云嶺より三丁許下りて所々に天狗の栗といふ物あり樹々みな屈曲して細梢下に垂る柳櫻の垂れたる如し木の芽ふく頃は紫にして藤の發たるか如し實は小さく從來天狗の栗と稱して取るものなし此木他所に植るときは伸て屈曲する事なしといへり云々

風 穴

浦村は入野谷の奥にて此地に風穴あり前浦奥浦の間山の尾崎に松柏茂りたる森あり中に屈曲して岩の重りたる間に穴有て常に風を生す此岩を動し或は岩を見んとすれば必大風吹出て荒る也仍て其邊りへは人の寄る事を禁す此岩の上に風穴明神の祠あり風除の爲に祭るなるへし

此里の島に塚有て上に石碑あり文字分明ならず土人傳へて小松惟盛の墓とす長久寺といへる木主あり一翁常夏大信士としるす口碑に傳へて建保二年卒といへり平家物語に惟盛潜行して熊野浦に至り海に没入すと見へたれとも國史畧に惟盛海に没入するにあらず唯跡して伊勢國安野郡に潜匿し承元四年三月念八日三十三にて病歿す邑中に其子孫存する者二十一家隸屬の後二百五十餘戸ありとなんさらは此地に来れるにも非ず中村元恒か信濃奇談に山室村遠照寺に持傳へたる古證文に康暦二年六月小松四郎源盛義としるせるものあり其頃此地に小松氏ありて宇良村の墓もこれらの人なるへし氏の同じきゆへに惟盛と誤りたるにあらずや云々

勝間山仙境

高遠城下より十町あまり東南に勝間といへる山里あり端山の中ながら高山幽谷ありて胡鬼の子加茂竹葉履唯二日コキハコハも有よし吳越春秋に胡鬼樹本草二部卷子此二島の内なるへし後水尾帝御製つくはれのそれにはあらでこの今宵の月は空にすめし山法師の歌にうたたらや無動寺山のかんまんあへては無にまさるこそすれコキハコハたかかんまんと云よし也 墓の類を生す此地にみつかひと云山あり又二里計南に袴腰と云山有一家戸倉川下より見上れば山の形はかまの腰に似てみつかひ

此先人中條翁  
が説ヲ擧ルノ

此ヨリ以下  
條ハ皆是信濃  
奇談ニ擧テ  
處ニシテ先人  
中條翁ノ説ヲ  
本據トスルモ  
也

南の峯つゝき也此戸倉の山迄を仙境といふみつかひの峯より少しく東に下りてわづかに平坦なる所あり中頃の事にやありけん此所に庵を結ひて住者あり青き牛にのり髪を被り角頭巾を着て茲に遊ぶに年久し常に犬二疋を飼おきて市中へ下して辨用せしか或時この犬狼のために害せられぬ夫よりはみつかひから青牛に乗りて市中へ出ぬ後終る所を知らず里民稱して青牛道士といふ今に口碑にのこれり其庵の跡今に井水ありて深たり早には土人此所に行て雨を乞山上に道士を飼て聖權現と稱すまた感應靈通大徳と彫し石碑ありて祠と並ひ立り

葛麻山歌

蒼顔道士 青牛 葛麻山中遊 薜荔之衣 小角巾 棒飯 自供果 由傳 叩角 何歌 奏舞 未嘗 道徳 老聃 流書 卷不須 掛角上 唯有 眞形 背裡 留前 曠且 閑 虛無 宅從來 轉與人 間 隔修 眞每 唱原 道歌 幾年 研精 煉白石 一旦 沖朝上 青天 唯今 只見 飛昇 跡 斷骨 從來 不可 尋 牀頭 不見 雙玉 鳥棲 止孤 峯 擢高 表 樂來 白砂 空 旋 仰瞻 彩雲 蔽 點綴 下 瞰 寒谷 抱 綠綺 飄風 時又 動天 籟 恍如 仙樂 度 縹緲 世上 今無 眞語 傳堪 惜 仙境 供臨 眺



高遠藩士 坂本俊登

馬 角

高遠より南一里余にして新山の内に芝尾といふ里あり寛延元年其所の農家の馬栗毛の牝馬にて三歳なるが兩耳の間に一つの角を生ず春に至て落たり又其跡に一角を生ず其角も落て又生ずる事都て三度也はしめ落るはしらす後の角は功德院へ納め今其家に傳へて有ものは驚馬の時の角也色はうす黒く牛角のことし

國史天智天皇七年日常陸國獻有角馬 前漢書曰文帝十二年有馬生角

吳右角長三寸左角二寸又成帝綏和三年二月大觀馬生角左耳前圍長各二

寸晉書曰武帝太興元年遼東有馬生角在兩耳下長三寸同安帝隆安四年十月

梁州有馬生角云云

異國にも珍奇の事と見へてかく歴代の書にも載たり

本朝にも諸寺の寶物にまゝ有眞偽はしらす身延鑑にもみゆ瓦礫雜考云周新か名義考に古詩に萑蒲開花馬生角と見へたるは上になきものをいひし也但し呂氏春秋人君失道馬生角又京方易傳臣易上政不順馬生角と見へたれば禎祥の物にはあらず



鷓 鴒 石

大草の里の黒牛と云所に風穴有常に風を吹出す事扇風の徐々たるに比すへし其麓の草野に鷓鴒石あり其側にて言は石も

同じく言ことく對ふる也讀鼓三絃みなそれくの聲をなす障子を隔て聞か如し

東涯の遊勢志に勢州市瀬村にかゝる石あり但此石は留の音は曾て對へず不審なる事也と又志州の海邊安樂嶋と云所にもありて同言石と云唐鄭常の冷間記に礮石といへるこれと同じ又雲林石譜に見へたるあむ石は色の似たるをもて名付海内奇觀に見へたるあむ石は其形の似たるをもて名付しといふともに重寶錄に書たり云々

眞 菰 池

和爾雅に所不知の名所の中に眞菰か池と云池見ゆれとも同名多かるへき地名也傳へ云むかし貝沼村に貝沼某といふ人住けり或時狩に出て池に眞菰のたはふれ遊ぶを弓にて雄の首を射切たり其後また雌をも射殺して見れば初め射たりし雄の首を羽翼の内にはさみ居たり是を見て發心し僧と成此所に草庵を結びて跡を弔ふ寂して後鷺養院東岳玄光居士といふ年代しれす其後此草庵を繼て寺とし玄光居士を開基とす鷺養山東光寺といふ願應といへる僧慶長三年の建立とかや此をしを射たりし池を眞菰か池とて形はかりの小池也

毛詩品物圖攷曰雉豹古今注鷺養鳥類雌雄未會相離人得其一則一必思而死故謂之匹鳥此方所稱屋施是鷺養鳥一而尾有槍者也云云

舜水談綺云日本にて鷺養ををし鳥といへとも鷺養は日本にはなく日本のあるは瀧嶋也云々 抄名集故事因縁集 著聞等に同説多し

塩井

鹿埴の里は高遠より八里飯田へも八里ありて前岳 駒ヶ岳と云 麓に有此地に鹽川といふ川あり東の山より出て西へ流末は天龍川へ落る此川の邊はみな平岩にて鹽の井多し中にも多くある所二箇所有しか一所は洪水に埋れり今鹽畑と云所に大き四尺許青盆形の所あり此岩中より鹽水多く潮出る是を汲て焼ときは白鹽となる也其味ひ鹹き事常の埴に倍せり里人焼すして其儘用るに味ひ焼たる埴の如し其外海溝大埴小埴孫埴埴原埴澤埴等總て七埴といふ

此埴井海水の干満に隨て潮の満る時は岸に溢れ干汐の時刻

鹿埴 東  
花園待後長々  
ゆき  
いづか  
おろし



澤井の銀杏樹  
ハ余性年宮下  
ハ長衛ヲ訪テ  
ハ觀シテ目撃セ

に至れば水溜る也甲斐志曰風  
嵐山下奈良田に埴井あり 即此  
の東に 又井埴山埴地埴木埴石  
當る也 埴等の事代醇篇に見へたり  
鹿埴の内入澤井といふ所觀行  
堂か側に大なる鴨脚木あり 圍  
の太さ四丈はかり枝南北には  
ひこる長さ八九間許枝幹もと  
に乳の如きもの下り垂る事其  
數をしたらす乳の出さる婦人は  
を照しのめは乳の出ること妙  
也と云

大河原

鹿埴大島氏  
原  
岩々々々  
埴のつづみ  
あつた  
やま  
人  
同宮本氏  
宗辰  
宗辰  
埴のつづみ



大河原は山路峻険して何方よりも馬足たす土人の飼馬は小さうち背負來て育るなり此地に宗良親王三十五年の間住居なし給へる跡ありて今に御所と云南朝の興國二年より天授元年に至て諸國へ出給ひし事有といへとも多くは此所に居給へ

り此親王は後醍醐天皇第三の皇子始妙法院尊澄法親王遠俗して宗良親王と號元弘三年征夷將軍に補し信濃宮と申す事跡南朝記櫻雲記等に有此地の上倉と云所に彈正林と云所有爰に古墳有て親王の墳と云傳れとも此親王は後に七十三歳にて遠州井伊谷に隱させ給ふといへり此上倉より一里上りて金澤と云所の者古鏡を穿出し親王の御鏡とて珍藏す

李花集千首和歌集は此親王の御集也此二部は群書類聚に出

又新葉和歌集は弘和元年十二月宗良親王及群臣是を撰

李花集

興國五年信濃國大川原と申山のおくに籠居侍しにたゞかりそめなる山里のかきはわたり見ならはぬ心地し侍にやうくわかぬ春の光待ち出る鶯の百囀も昔思出られしかは

かりのやどかこふはかりの吳竹をありしそのとや鶯のなく

宗良親王

信濃國伊那郡と申所にて花み侍しに思出侍ける

ちらぬまに立かへるへき道あらは都のつとに花もをらまし

信濃國伊那と申所に侍し比五月雨はれまなかりしに都へ申つかはしける

思ひやれ木曾のみさかも雲とつる山のこなたの五月雨のころ

信濃國大川原と申侍ける深山の中に心うつくしう庵一二はかりしてすみ侍ける谷あひの空もいく程ならぬに月をみてよみ侍し

み侍し

いつかたも山のはちかき柴の戸は月みる空やすくなかるらむ

信濃國伊奈の山里にしはくすみ侍しに雪いみしうふりつもりて道行ぶりのたよりもたえはてにしかば

稀にまつ都のつてもたへねとや木曾のみさかを雪埋むなり

信濃國伊奈と申山里にとしへて住侍しかは今はいつかたの音信も絶はてゝ同世にありともきかればやなと覺えし頃よみ侍ける

我を世にありやととはは信濃なる伊奈とこたへ上嶺の松風

信濃國大河原といふ深山に籠りて年月をのみ送り侍しにさらけいつと持べき期もなければ香坂高宗などが朝夕の霜霧をばらふ忠節もその跡かたなからんことさへかたはらいたく思ひつゞけられて

いはで思ふ谷の心もくるしきは身を埋れ木とすぐす也けり

### 松島王墳

松島の里の北に王墓と稱て大なる塚有上には松並ひ土人傳へて敏達天皇の皇子頼勝親王の墓也といへり然れとも日本紀皇胤紹運録等にも頼勝親王と云は見へす中郎元恒の伊奈志畧に曰近年秋葉權現を配し祀る嘗て文化十年の頃神祠を造營すとて塚の回を穿崩しけるに瓦燒個人を多く穿出す其長一尺はかり皆官服の體也穿もの恐れて元の如くに埋たり

按日本記垂仁天皇三十二年野見宿禰新に葬儀を譲り殉死を禁し出雲國より土部百人を呼び地を取て以て人馬及び種々の形を造り生る人に易て陵墓に樹る事後世の法とす依て此土物を號て地輪といふ又立物と號云云

又玉涯隨筆に筑後久留米城外に人形の原といふ所には數多土個人山の原に臥倒れあり其大さ常の人のことくにして其様躰唐人の如し其外掘出す器物なども有しよし今殘るものは石人石室のみ也好古日録曰人形が原は禮體の帝の御宇筑紫の

先人中條翁書  
伊那史略十六  
卷ヲ著ス今茲  
原拾葉中ニ收

磐井造たる石人有故に其名有委くは釋日本記に見へたり  
 是も往古の土俗なる物かされは尊貴の慕なる事を知るといへともすへて傳へなれし又其傍に龍宮塚と云あり上に穴有  
 平石を置て穴を塞く土人口昔此穴龍宮に通す書を贈て器物を借るときは則穴より出て有其後借て返さる者あり爾來貸すと  
 此事諸所に言傳へて類多き俗説也疑らくは皇后といへる事か皇后龍宮國音相近し因てこれを説るなるへし此里つゝ木下  
 村に天皇崎后洞といふ地もあれば也近年土人は是を發んとして大に崇を得たりといへり云々  
 然れとも天子皇后の此地に來給ふ事なし按に配流の王子などを天皇と崇め其夫人を后と稱しものかさなくんば筑紫の磐  
 井の如き豪強のものゝ皇風に授す潛に天皇皇后の名を犯したるか

竹 魚 いはな

駒ヶ岳の麓は篔簹りて川の流をおほへり其柴いはなといふ魚に化するといふ或  
 人木曾へ越るとて壺平といふ所にてこれを見出し折取歸りて人にも見せたるよ  
 し飯田の市岡氏千たるを蔵す是を見るに篔簹の化したるにはあらず 筆の如く皮  
 おほへり等は丸く二方よりおほへとも此物は平みに一方よりおほひて形は魚に  
 似たり伊藤氏か説に唐土にても竹魚と云て篔簹の化する物と云よしいへり鯉の類  
 にて山深き川の岩間に滑むを以て岩魚と云又やまめと云 千曲川にて鯉の子をやま  
 山の鯉の時にて  
 いはなの事也



駒 岳

駒ヶ岳は木曾と伊奈との間に秀て十餘里に連亘して實に屏風を立たるか如し俗に三十六峯八千鎰と云續日本紀曰天平十年  
 八月信濃國獻神馬黒身白鬚尾云駒岳の名此に出るか宮所小野牧みな其下に有今村に龍飼山あり宮所の龍か崎あり皆是山  
 脈因て龍を以て號るなるへし馬八尺以亦龍崎觀音及び羽廣の觀音みな馬の疾を祈るに驗有といへども駒ヶ岳の説に出る也  
 三季物語に天正十年織田右丞相甲州を征伐して軍をめぐらし諸將に向つてわれ聞く駒ヶ岳に四百年來に及ぶ神馬あり同年  
 諸州の軍卒を集てこれを狩得んと思ふむかし右大將の富士の牧狩に倣ふへしと 豫支度に及ぶ所其年の六月明智光秀か爲  
 に弑せられて其事やめり新著聞集に寛文中尾州の有司登山の時大いなる 馳を見る首の毛尾も地にたれ引馳は日月のこと  
 し恐しき形也此馬人影を見て岑の中段まで靜に登りしか俄に雲たちおほひて行方しらすと云々又此東の方に馬の形した  
 る大岩あるを以て號るともいひ又雪の消んとする時駒の形一體全備して見ゆるを以て號るともいへり又駒形の南の方に種  
 蒔爺とて四月の切笠を被柄杓を持たる形遠方より駒とひとしく見ゆる此形現るを大豆を蒔の時節と云ならはせり往古は  
 登る事稀也近來は其邊の里俗をりゝ登山す元文寶曆の一覽記有り其大意山中廻り九里餘日數二日半にて歸る宮田小出よ  
 り登る事二里程行て權現釣根と云所より諸木野篁しけりて道なし大木の倒れたる上をまたかり下を俛て登るまな板倉など  
 いふ所嶮也延松芝の如くなる上を枝に取つき登る事數十丁是よりは露氣なし夜も物濕す此松の外には丸輪草の如き草又  
 黒色の百合あり常の百合よりは少し小なるはかり也紅白の五月躑躅花至て小し右の草木里に植るといへとも暑氣に至て保  
 たすといへりのか池と云有都て山中に三所池あり何れものるか池といふ此所の池東は御所山南は駒形ある山西は岳つゝ

コレ先人中傳  
 信濃奇蹟  
 ニモ載マリ



北は大澤より其中に西より見おろす所長丈百間巾六十間と云水面青き事藍の如し中に赤き筋あり其形龍のごとく南より  
 ぐねりて北の方細く少し西へひねりたり此池より三町はかり登りて本岳は雲を帯て南に高く峻嶒重り谷々を見下せは数千  
 丈漫々たる海上を見るか如し白雲霞霧たり是より峯まで皆巖石を疊嶺組いふはかりなし小松希に生て岩間は白砂はかり也  
 巖にすかり又は岩より岩へ飛移  
 りからうして登る事十町餘り峯  
 は鍋を伏たる如にして少し南へ  
 長く平也置草に似て重ねうすく  
 蒿の紅葉したる如き草所々にあ  
 り夏の頃花咲ぬるや希に實の結  
 ひたるあり頂上より見渡せば南  
 はうつぎ岳の大山有て飯田の方  
 は見へす西は尾州伊勢浦東北は  
 富士淺間遠山をはしめ近國の高  
 山みな見ゆるといへとも村里は  
 一面に平なるのみ也本岳より駒  
 形にみゆる山は東北にて四丁許

駒形山



あり同じ並び二丁許東に天狗岩  
 といふあり此岩根より廿間四方  
 とみえ圓く中ふくらかにして末  
 細く中腹より上に東西へ横長な  
 る穴みゆる又錫杖岩とて見所多  
 き岩あり又岩鳥といふあり首長  
 く雉子の雌に似て腹の下淡白く  
 足黄色に少し赤みありて指際ま  
 て毛生少し平みありて眞鴨の容  
 にも似たり追立ても舞す側へ寄  
 れは岩をつたひて去る皆同し事  
 にて雌雄分らず此山七月の頃雪  
 消ぬされとも谷々は其頃とても  
 雪深也



光前寺

光前寺は上穂の西三十丁にして不動堂あり駒岳山と號し又寶積山と號す寺領六拾石天臺信州五ヶ寺の内なり一里半谷に入て不動の瀧あり甚奇觀也三月廿八日不動の緣日七年に一度兒の舞臺は泉水の中に立て詣する道も泉水の島にいたる石橋を過て行境内の風致よし茲に寫經の大般若あり奉納の緣紀に曰往古遠州府中に天満宮の廟あり祭祀に至毎年里民委貌端正の者を探權に入て是を廟の後に置丑の時に至て廟頻に震動して怪神兩三號舞し信濃の早太郎今夜來ることなしやといふ一神なしと答ふ時に神權を毀兒を提廟社に入る潛に關ふに身の毛立て怖しく里民の悲熱言へからず議て曰怪神の早太郎を訊て怖るゝ早太郎は何者にや社主則ち信陽に入て尋るに當山の犬早太郎と呼ふを問寺主に語て犬を賜らん事を乞寺主是を免す歡て奉回祀に犬を權に入社後に置時に神問答如恒權を毀早太郎躍出て吠其勢尋常ならず怪神力を盡して戰といへとも遂に喰殺さる明且里民社主往て視るにいとも年老たる狸也人々歡に堪ず謝恩の爲大般若經を當山に奉納す彼社僧一實坊辨存自書寫し其弟子淡路の阿闍梨光允供養する所の者あり云云

正和丙辰卯月八日とあり文化二年修補す文政十二年迄五百十九年

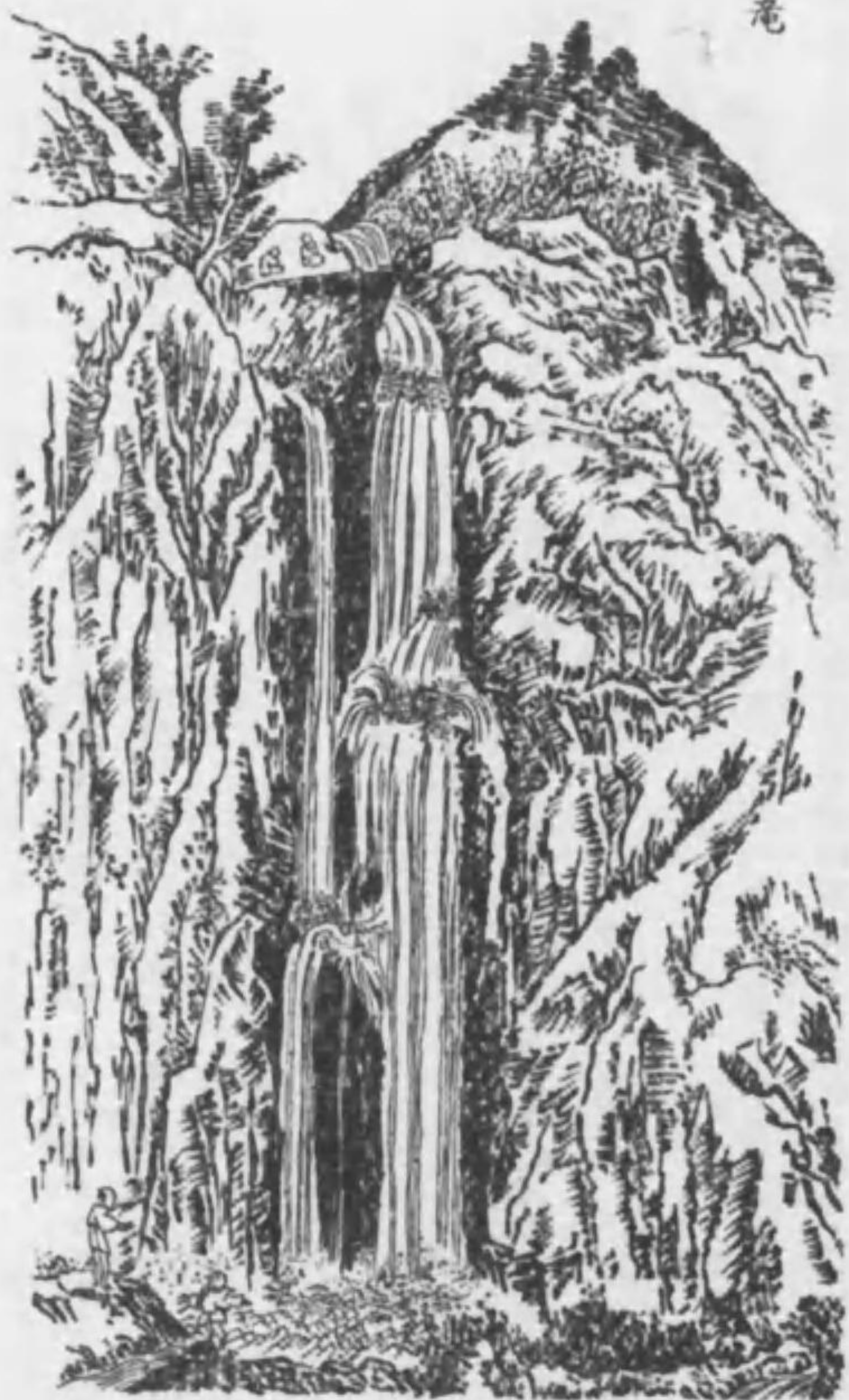
大嶋山瀧

大嶋山増瑞寺は天永三年比叡山の竹林院勅譽僧都の開地にて寺領二十五石毎年三月八日藥師の緣日とて大なる獅子の形を造り孟轉主と云者これを乘猿の面を被し者一人幣扇を持て前に立又鬼の形に出立者二人鐵棒を以て前を拂ふ

留大鼓の柏子いとひなひて

古雅也 寺より一里餘瀧を沂て瀧あり三十尋落下りて中段に瀧壺あり是より下し又三十尋と云

大嶋山竜



關龍

文化五年七月廿五日雷雨すさまじく暴風吹起り山林動搖して黒雲地にしき雷電四方にひしめき木をぬき枝を割石をとはず

故に民家戸を閉て開くことあたはず只今天傾き地陷かとおそろしなといふはかりなし翌日風雨晴わたりて其邊をみるに此烈風の過る所樹木みな折れ倒れたることおひたしこゝに吉田村の百姓與市といへるもの龍の皮を拾ひ得たり腹の皮と見へて六寸四方はかり青白の光ありて石決明の如し其頃遠近傳へて見るもの日々に市の如し又其頃山吹村の者落葉掻に行て是も同じく五寸はかりの皮を拾ひたり其邊の醫家又好事のもの少許つゞ分得て所々に珍藏す

按に是開龍のわさなるへし古より開龍の説あり感通傳に曰貞觀十三年龍大に開ふ雷震擊水火交飛や久して乃靜まる塔廟もとの如し人皆龍の毛を拾ひ得たり長さ三尺許其色黃赤也云々又北越にて寛政三年八月朔日信川の西江戸巻の傍なる池水より起りて開龍の事ありと云

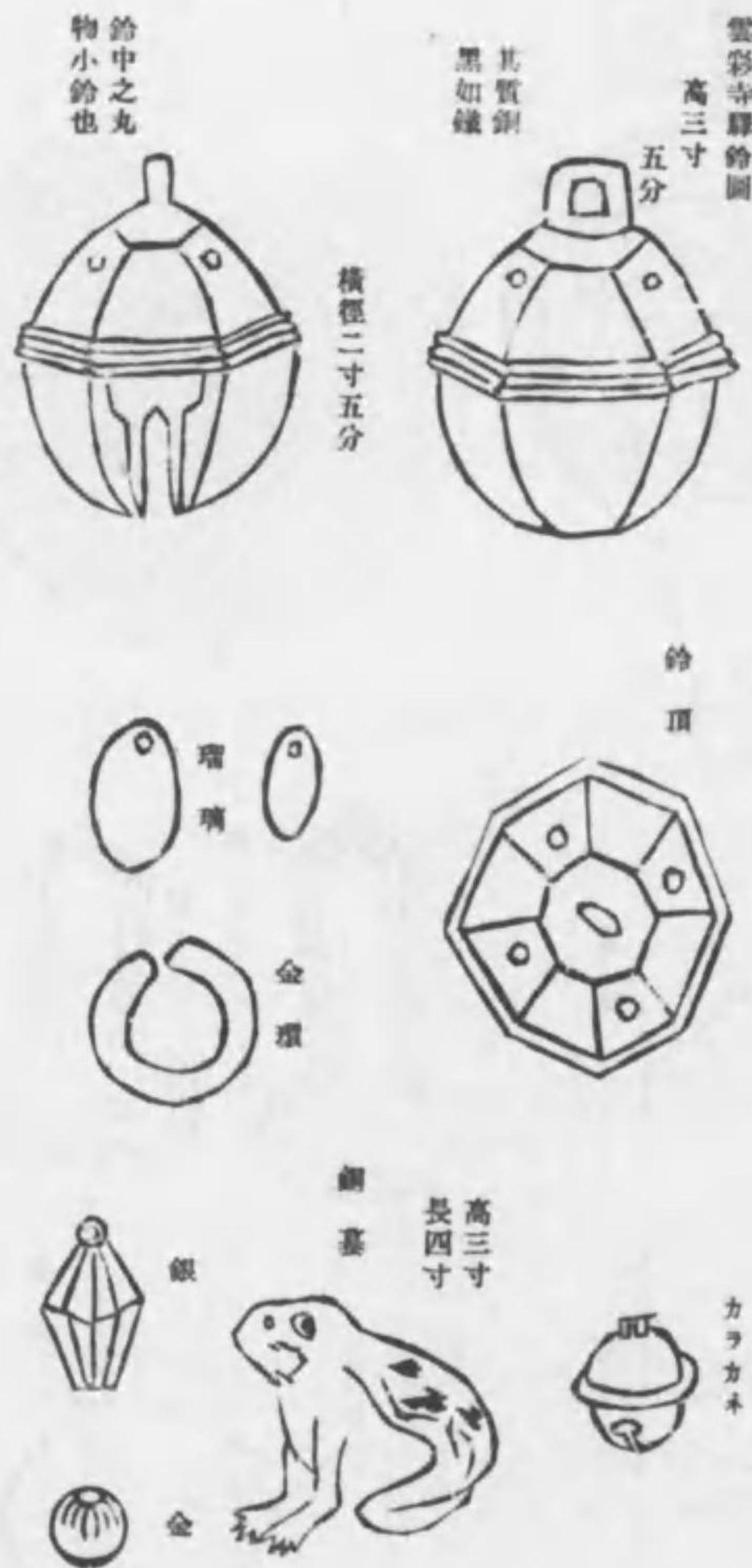
三 足 鶏

信南奇談に近き頃大泉といへる里のある家にて三足の鶏を生せし事あり頼耕録に三足及四足の鶏の事見へたり又十年前高井郡福原の里にて兩頭四足の鶏を生すと云文政九戌年川路村にても兩頭四足の鶏を生す是をもてみれば四足なるは二羽になるへきか一つになれるにや有なん是はたきく有といへとも三足は希なる事とみへたり

雲彩寺古物

南條の雲彩寺は白鶴山と號ていかなる由縁や有けん謠に此地は鎌倉の權五郎景政の舊跡とて庭に石塔もあり又は夢相國師の開山ともいへり本尊聖觀音本郡三十三所の内二十二番の札所寛政六年寺建替の時境内を廣むるとて寺の後背を穿けるに

積石にてこしらへたる洞穴あり十間餘も崩しけるに猶奥深くして今に寺の後背に洞穴其まゝあり中は暗くして見ゆる所は左右みな積石也是より臥龍山と改む此洞より取出せしもの如圖此品所々へ分配して今寺に存する所鈴二つ瑠璃の玉一つ銅環一つ有のみ此外減金の浮漚丁二三百朱梳馬具劔刀の類有しかみな朽敗すといへり又上溝村の一民島より一箇の鈴鏡を穿出す一鏡に五鈴あり今に祠中に納置



古鏡 三寸



文化年中  
但馬國二  
方郡ニテ  
掘出金器  
此圖ニ似  
タリ

鍍金長五寸徑三寸



銅長一尺

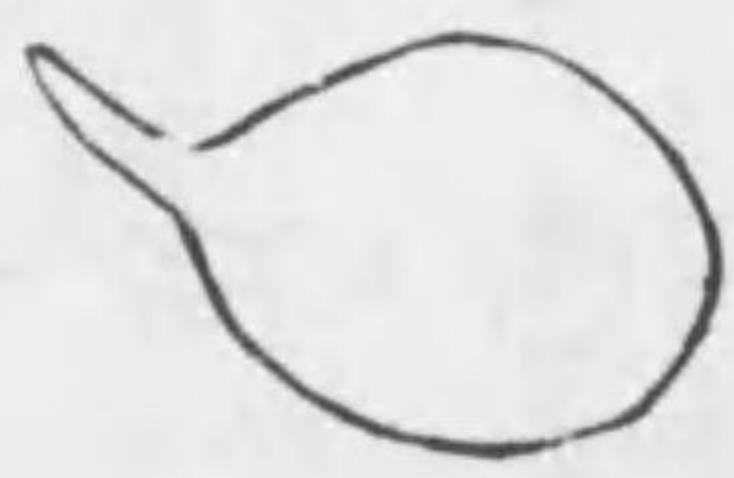


同 徑七寸



同 徑五寸

素鏡 上無口



素鏡



徑五寸餘

同 五寸



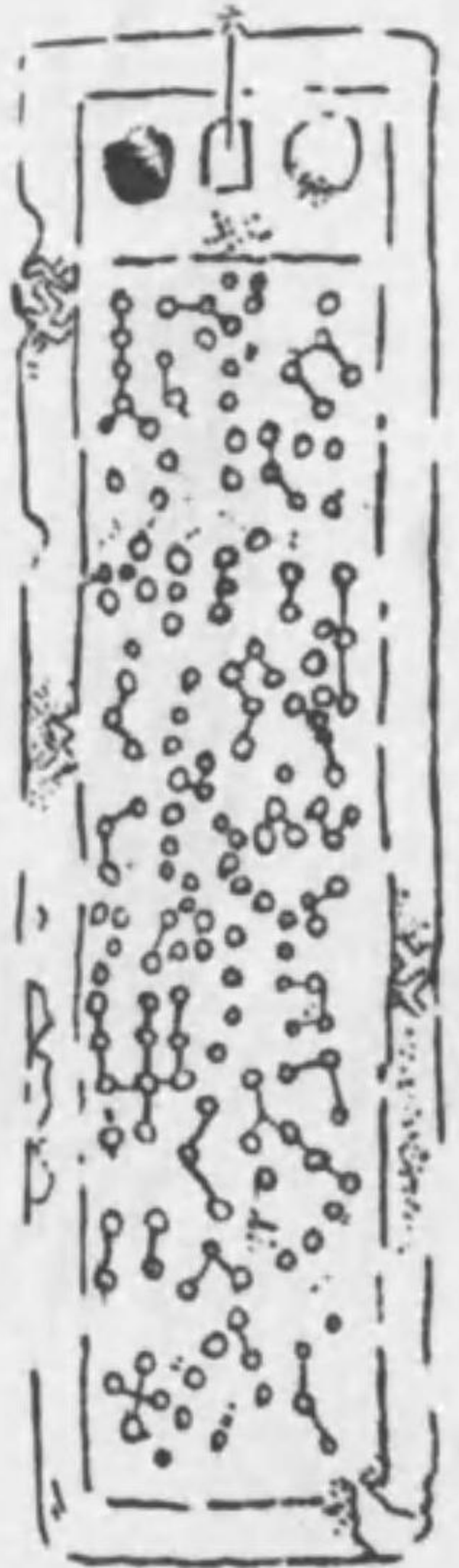
銅版

飯田の茶來といへる老人の所藏に銅版あり是も土中より穿得し物といへり諸所鑑定を經るといへともいかなる物とも知れず其記に曰

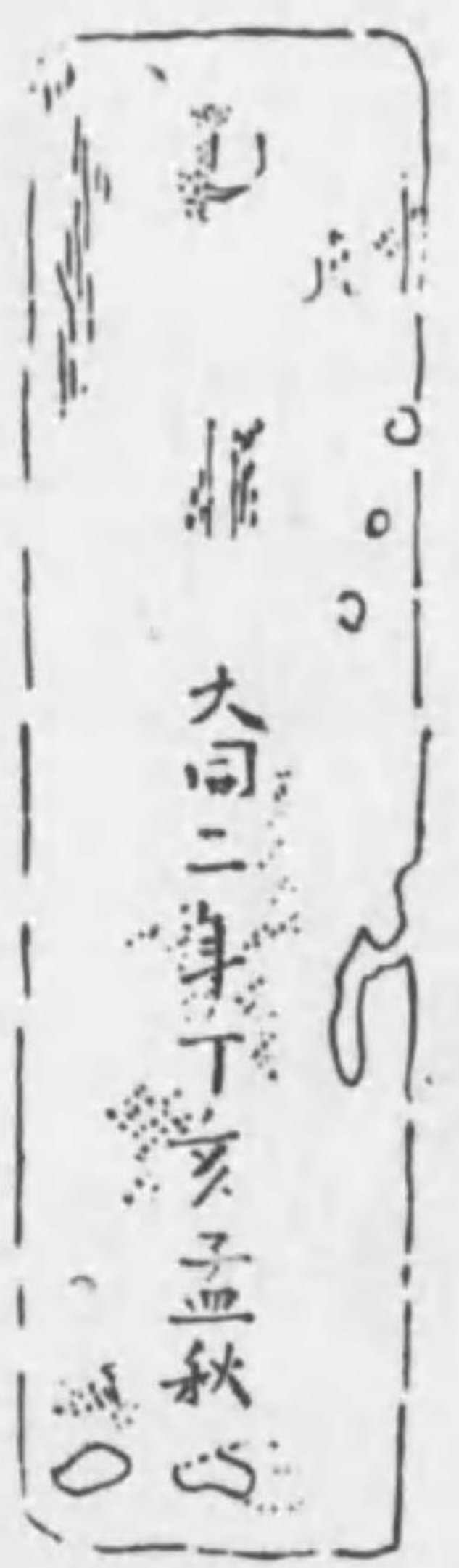
此銅版茶來翁所ニ珍藏也表  
鑄出日月星辰裏有大同二  
年丁亥孟秋八字其爲レ物不  
可ニ得而識焉翁因持之遊東  
西之兩都所レ經ニ鑒定自中  
亞相白川老候至皆川淇園木  
世庸伴萬蹊木内石亭水野白應  
塙保已一龜田鶴齋太田南畝  
皆知古物不知レ爲何物也  
翁又持レ之歸ニ于家以爲書齋  
之物使予志此良尙俟識  
者之出云

銅版

長一尺 六寸



長三寸 一寸



文化丁丑臘月二十有八日

圭陽水澤貞應需

冠石

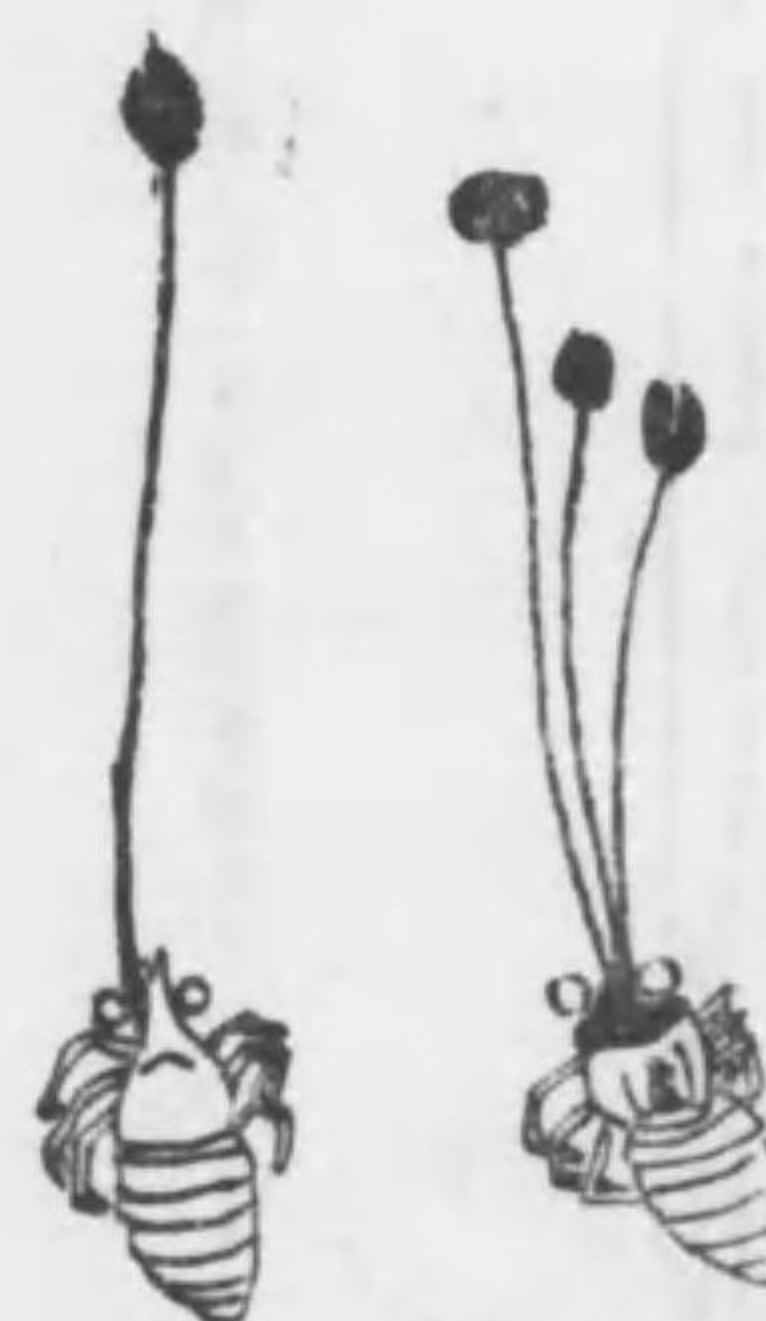
大久保の里は大石多し天龍河の岸に臨てすゞ石  
蛇石夫婦石鞍掛石有山によりて大鼓石有打は大  
鼓の響有硯石六七間窺み有其上に駒の爪石跡  
の跡有又草鞋の跡有石ありて天狗の足跡と云産  
神を箱石明神と稱祭る其祠の後背に箱石と云石  
有其上に冠石有大き六尺許四丈許峙たる盤石の  
上にあり

蟬

飯田の城外松林の中に蟬の頭より齒を生する  
物あり是を蟬茸と云金匱要略記曰蟬花といふ  
者あり和名セマケと云蟬の蟬に化しそこな  
ふて頭に茸を生する者也云々又市岡氏云虎岩村  
の内北原の里にては大夢の根化して蟬となるさ  
れば蟬化して茸を生するには非ず茸の根より蟬  
を生するなるべし



此石一丈ハカリ  
此石六尺ハカリニモ

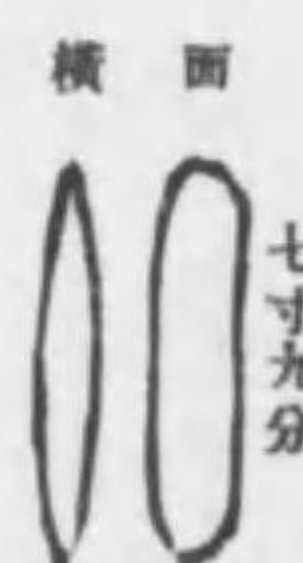


誕生石

此二石圓  
原ヨリ出



長六寸六分  
灰白色  
少々平メ有



七寸九分  
民家に持つたへて婦人  
産に臨む時は手に握  
りしより、因て誕生石  
と名つくと云

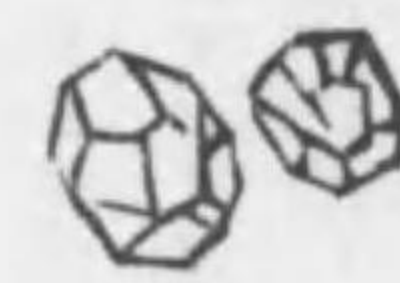
神代石

整二寸七分  
横三寸六分  
十年前風越山ヨ  
リ出ル 灰白色



八方多賀根遠山産

雲根志三編ニ  
云如此物和産  
有事未聞漢産  
又不詳最奇品  
可愛物也



露石  
カントクイ



色青黒

安永年中島田村雷雨烈風にて山麓  
洪水の後谷川より流れ出る



山石木の産石  
川原の山  
いせつ  
袖ヶ洞  
云所不代  
多し

以上  
飯田市岡氏藏

豊浦玄貞ハ王  
父ト交厚シテ  
産家ヲ以テ  
保翁トシテ  
メニ其時行  
ス

山吹崎人

寛政年間山吹の里に豊浦玄貞といへる醫師あり何方の人といふ事を不知妻もなく只單身そくらしにける其性寡欲放蕩にして細節に拘らず一崎人也或時飯田に赴きある富商の許に立よりしに當時水無月の土用干とて多太の衣類を晒す中に祭祀の時躍子の着るへき料に調したる模様の大きやうに花やかなる襦子を見てこよなく愛しか己着てみん事をいひよる其視事もの詰めて着せければ喜びて身にまとひ其意暢て興しける彼者便所に立行し跡にて其まゝ出て炎暑を厭はず人の怪しみ笑ふをも省すして家に歸りける彼方にては衣服を藏る時に一つ足されは俵は醫師の着て戻しにやと人を走して見せければ其襦子着ながら家に伏むたりしと也渾て病者を診見るに無言にて手を出せは脈を考て藥を與ふ病着の様體委く話るときは固辭て無病症の明に知るゝ者ならは何そ其藥を用ひざる吾は其精に至らずとて藥をあたへず又節季に人の藥料をおくるをは傍の棚におくへしとて手にもふれず商人來りて賣物の價を乞はば棚を指して彼所にあり取へき程持ゆくへしとて其人の取去るに任せり或時一夜盜賊來り壁をこはち入て器物衣服など取てけり後にあたりの人見付て壁のこぼちたるは盗人や入つらんとて主翁に問へはしかなん有ける家の貨は皆とられぬとぞ事もなけにいひけり其みくるし此壁つくるひてんといへはいなとよ彼盜人たからつきて又來らん時便あしかりなんとて壁もつくるはすてやみにけり總て此人はよろつのさまよの人に替りて種々の事とも有つれとこゝには省きつ

春田打

島田の里は育良庄降松の郷也此内に笠村といふ所あり此所に住ものを呼て笠の者と云家十軒餘遺に住こと年歴久し古より此者等毎年正月より二三月迄春田打といふ事うたひ舞て郡中を廻り米錢を乞其さまいまた他に見聞せざる事也何れの頃より始りしや詳ならず先二人一組として四組あり一人は二面を懐中し一人は大鼓を打袋を荷く此面甚古雅なる物也何れも猿樂の面と見えて喜助面頼政面重箱面つり眼なとなつく二面の内一つは女面也始男面を被中半より女面をかふる昔よりうたふ事は定りて有春田打秋收る迄の事をうたふ飯田の侍醫太田中彦足を殘らずうたはせ書とめしをこゝにするす

伊豆の奥の御一人伊豆のおくのあら銀。千も万もめしよせ。春の日の永いに。銀から細工をめさる。銀からさいくの所に。のみに小釘のくり鉋。まさかり打かついてやとひて手さき長の銀には。はさきなかを切すけて。先は北のまきが千ちやう。南の詩か千ちやう。五千や五萬ちやうの。お田の中へまゐる。苗代を打ちやうと定めて。一銀には千石。二銀には二千石。三銀には三千石。うなひよせ給へは。畧

按に伊豆の奥の御一人と云ひ鎌倉殿の御所の御庭になと言事のあるを以てみれば北條家執権のころより云傳へたる詞なるべし



白山窟

上飯田の白山寺は風越山と號天台山山の麓にあり鳥井より山に登る事五十町にして白山権現の神祠あり例祭又十丁登て岩洞あり洞口甚隘く肥滿の人は入がたし常跡の人も薄衣にして入數十歩にして方二間許の所に出る此に四尺餘の窓穴あり又傍の地に穴あり二間はかり下り横へ行事七八間にして又廣き所あり此にも窓穴ありて明也此穴より覗みれば山谷すへて別世界に出たるか如し此所甚精潔にして山蛇山蛇の客次と云ならはせり是より奥へは水のしたより多くして入人なしと云



園原

新古今  
會の原やふせ屋に生ふるはききの有とはみへてあはぬ君哉  
保元哥合  
とくさ刈會のはら山の梢よりみかゝれ出る秋のよの月

坂上是則  
源仲正



水久百首  
みち遠み日も夕暮になりぬれば曾の原までも持てこそ行

六條院大進

國原遺韻 播詞林 幽僻誰人復續吟

祇不見君何所在 空山一樹古今心

韓天壽

國原は往古の官道にて美濃國坂本より五里餘惠奈岳神御坂を越て國原に至る

此間旅店希なれば大同年中傳教大師美濃の境内に廣濟寺信濃の境内に廣孫寺を立旅人を休しむ今駒場の長岳寺前原の觀音寺は右兩院の跡とかや寺領兩寺にて八石

國原より育良の驛の間川に添て靈神村に出此地式内阿智神 社あり圭田十石洪水に道崩て道絶今は細かけ峠にかゝりて小野川に出る御坂の

古道は荊蕪の中に少し残りてうす雪の降しく頃より分りて見ゆるよし此筋を穿ればたま／＼古陶器の缺なと出るといへり

今のはまき木と呼へるものは檜にて其本は五圍餘末は七つに分れて一樹森をなして尾上の木々の梢に秀て見ゆ此地人物質

朴にして正直一片に見ゆるのみそ古代のありさま残れる心地也けり

此里にすみよしの小祠あり住吉にはあらす炭好と書事又金寶吉次が葛籠岩伏屋の長者屋敷なと俗説多し今はたばこ第一

の産物とす

余往年兒彌六  
ヲ携テ御坂ニ  
至リ觀シテ今  
ノハハキ木ヲ  
目撃セリ

立石

立石村は飯田より三里南にて千頭山立石寺と云寺あり眞言宗 圭田十石觀音堂あり其東十二三間隔て澤の邊に立石となつくる石あり地上に出る所纒二尺餘徑一尺餘石色青白にして挿すときは少しく動かか如し寶永の頃受領の有司多の人夫に指揮して石

の回を掘せけるに數日穿といへとも其根のかきりは知れずといへり竟に原の如くに土を埋め回に欄を結て人をよせず又此一村は乾柿を業とす親木と云は三圍ありて柿に核なし此枝を接て一村柿林をなす立石とて名産也

本郡石類は上飯田正永寺原より石紙を出す奇品也大島村より貝石を出す又下條阿佐野より出る種々の貝石あり又木葉

石あり虎岩村角石鏡の如し自然銅也武石に似たり其外小野の針石英大島の石瑪瑙大河原の伽羅石鹿埜の薑石等也

蘿蔔石

大山田神社鎮西之村にあり圭田十石 祭所大國魂命此地往古よしか平と云中古爲朝の二男大島二郎爲家伊豆を逃れ參河國足助に至り

左兵衛重長爲家姉弟か許に忍居後此地に來り社司に身をよせ其女を妻

とし父爲朝大嶋に配流によりて大島を氏とし又爲朝の靈を八郎明

神と並祭故にいつとなく鎮西之村と呼とかや此境内に異石あり平

石の面に大根の狀あり葉は青く根は白く悉く薑き彩か如し其地

の西の谷川より土人み出し近き頃社地へ引たり

蘿蔔石

石色淡青白

惣長三尺許

横一尺五寸餘

兩葉青中ハ少

シ赤ミアリ根

ハ白シ



深見池

深見の里の産社の森の邊一年自然に土地墜入て凹と也徑二丁長三丁はかり水流て竟に池となる早にて水涸るときは森の梢水上にあらはるゝといへり



地の落入し事は異國にも後漢書晋書北史本記等に舉て怪異辨斷に其事を辨したり

早梅花

墨秀山開善寺は上川路に在 京都妙心寺に屬す建武二年小笠原信濃守貞宗の開基開山は宋國歸化の僧清拙正澄和尚大鑑禪師什物に飛袈裟と云あり最古物也雜物織にて輪子形のことく色は白茶の如く環の龜甲回り八角内丸く銀を覆輪と尋常の輪より大きにて五寸許也箇の蓋にしるして云嘉曆元寅年追禪師之船來筑紫博多浦以故世々相傳號飛袈裟矣云々早梅花の古木の跡は大門の傍にある遺樹は後園にあり八重の白梅にて香氣他の梅に勝り實は小にて他邦に信濃梅と稱する物也

一書に開善寺の早梅花は名におふ名木也村上頼平の家人地科文治といふ者武田村上戰場の隙開善寺の梅今を盛と聞へしかは寺にうかれ行つゝ香を尋て

ひゞき行鐘の聲さへにほふらん梅さく寺の入相の空

とうち詠し還る所に此あたりには思ひかけす見なれもせぬ女性一人女のわらは一人ぐして出來れり年のころ廿はかりと見えて白き小鞋に羅氏うつせみに出唐衣を着せざる時表着のうへに唐衣を代に着する物なりと云云 紅梅の下かさねにほひ世のつねならず月にえいし花にむかひて

なかむればしらぬむかしのほひまでおもかけ残る庭の梅かえ

とよみてしはしやすらひ居たり文治これを見て堪かねかたらひよりつゝ

袖のうへに落てにほへる梅の花枕にきゆる夢かとおもふ

といひければ女返し

しきたへの手枕の野の梅ならはねてのあさけの袖にほふらん

とよみてたかひにわりなくちきりけるか盃の數かたふけし酔に臥て夜既に明かたに也東の空よこ雲たな引ければ夢おとろきねむりさめて起あかりしに文治たゝひとり梅の木のもとにふして女も女のわらはもいづち行けんともしらす月は西に落て名残は我身にとゞまれり是は疑もなき庭の梅花の妖精なるへしかくて陣屋にかへりても猶その面かけのわすれかたく夕暮に也ぬれはそゝろに懸しさいやまさりなみたのためゆるひまもなく

梅の花にほふたものいかなれは夕くれことに春さめのふる

と詠しものあちきなくや思ひけんその次の日うち死したりける云云

摘要

是は師雄の羅浮の一詠

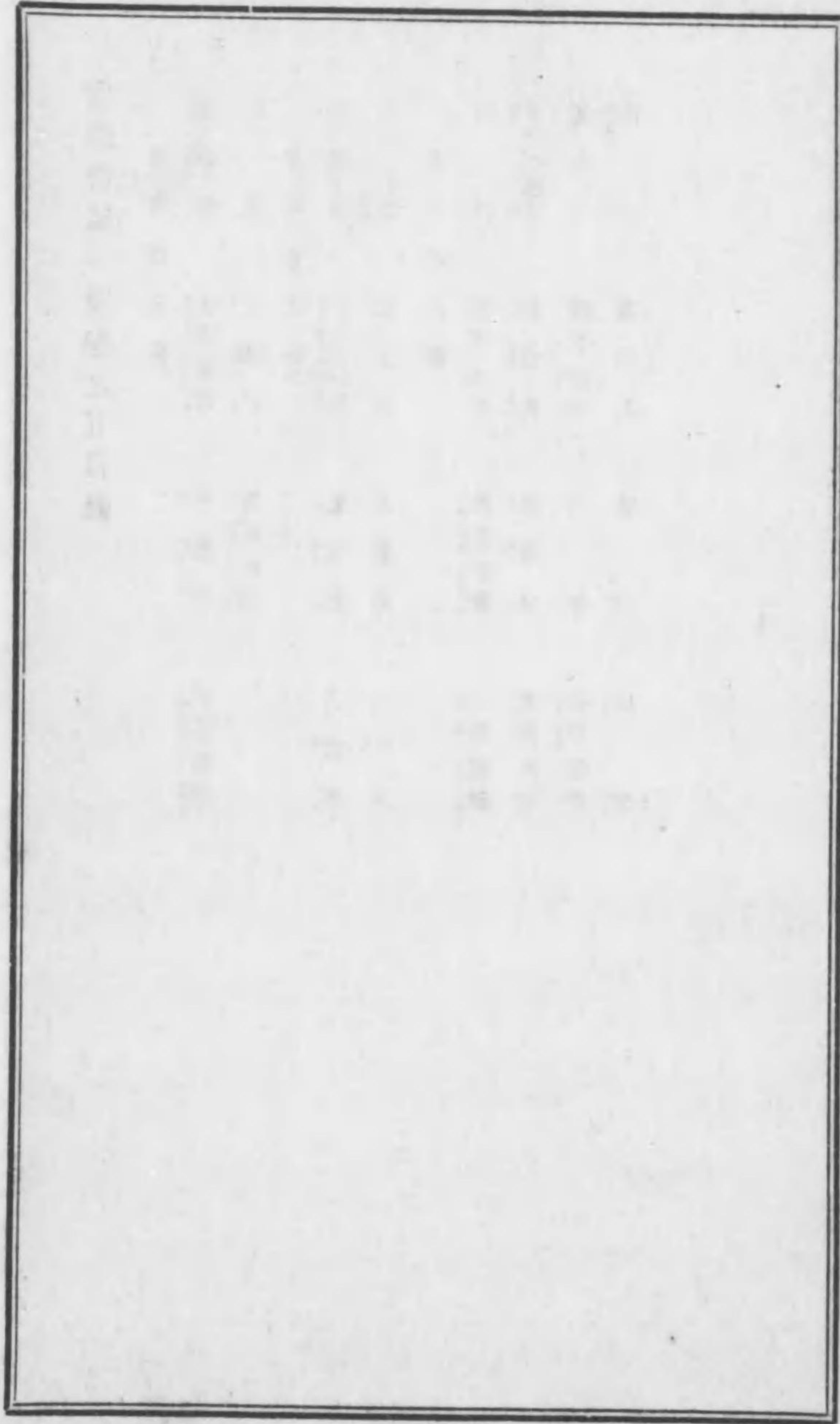
范至能梅譜云早梅冬至前已開故得早名

篤信花譜に凡冬至より前に開を早梅といひ山中平原又地の寒温によりて花の遅速あり

信濃奇區一覽 卷四終

信濃奇區一覽卷之五目錄

|       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 埴科郡之部 | 岩端瑩   | 山鳴    | 更科郡之部 | 姨捨山   | 石川玉髓  | 高井郡之部 | 保科    | 米子の瀑布 | 彌勒石   | 凹石    |
| 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   | 野茂利   |
| 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  | 雨宮貌跡  |
| 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  | 御安紅梅  |
| 古器物   | 古器物   | 古器物   | 古器物   | 古器物   | 古器物   | 古器物   | 古器物   | 古器物   | 古器物   | 古器物   |
| 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   |
| 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  | 松皮琴囊  |
| 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   | 無縫塔   |
| 小管    | 小管    | 小管    | 小管    | 小管    | 小管    | 小管    | 小管    | 小管    | 小管    | 小管    |
| 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  | 獅垂雄垂  |
| 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   | 飯盛松   |
| 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  | 墨坂三石  |
| 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 |
| 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   | 同玉石   |
| 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 | 白鳥山什寶 |
| 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   | 古戰場   |
| ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   | ハカ火   |
| 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  | 一目備體  |
| 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  | 荒井河原  |
| 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  | 神戶銀杏  |
| 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    | 山蟹    |



信濃奇區一覽卷之五

埴科郡之部

岩端いはは 蝨はつ

岩端は塩尻の下泉村しもいづみの上北陸道への往還にて路の傍に崩落たる岩石數々有又岩根の崩くずれて今にも落ぬへきさまなるをあふき見れば心消て恐き所也盛衰記に塩尻狭間はざまと有は此地なるへし此地兩山に狭間はざまにて上古千隈河の水此に湛たて佐久小縣は海也しと云傳ふ三郡の堺にて上は小縣是より

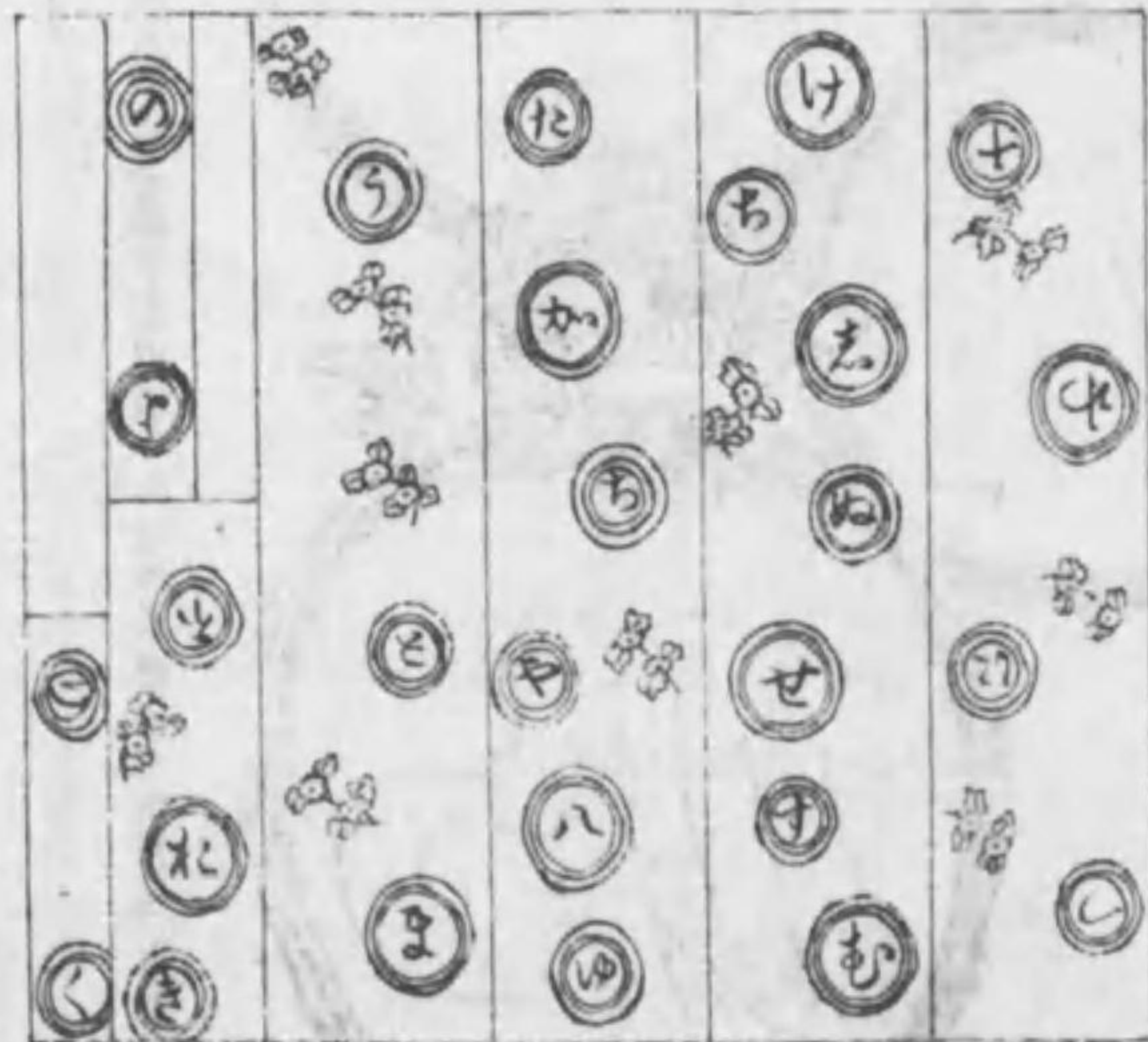
岩端石所いははのいしどころ



流に隨て埴科西は此より更級也  
千隈の河瀬東により西につきて  
替る事あれは河を隔て郡の接る  
所を三郡島とは呼けり此地風の  
吹廻しにてや登の集る事他に勝  
れたり毎年五月夏至を盛とす此  
邊は何方よりか別て登の多き處  
也しか皆こゝに舞つどひ來て群  
をしつゝ右に左に舞ちかひ又ひ  
とつゝに舞あつまりて鞠の如  
く幾度か飛揚し後には地に落る  
もあり中にも流水に落て流るゝ  
有目もあや也如斯する事三夜に  
して止愛厭する人多し

圓盡卓袱

龍田山耕雲寺は往古横尾村にあり今其基址を島となして寺屋  
敷と呼此地玄古烟草の名産なり玄古といへる僧作り初しより  
其名あり鼠村の塚に有を移せしより鼠の耕雲寺と云茲に東武  
新吉原京町一丁目三浦屋の名妓高尾の袱服の打敷あり高雄吉  
原を出る時媒妓の薄雲といへるに遺留に贈ていでぬ此薄雲は  
鼠村なる農夫の子にて幼名をてると云しか容貌人に勝れたる  
故に計らすも勾引されて三浦屋か許にとられ高尾の媒妓とな  
れり後に薄雲も或方に脱籍されける其主人逝去の後元禄年中  
にうす雲死其節歩卒二人鼠村に來て告村老赤池某外に二人東  
都に遺物持歸る其中衣服一ツ屏風鏡一面鏡臺掃帚等は債の  
債に赤池某へ贈れり此品ゆゑ有て塩尻の佐藤某か許に有し  
を衣服は卓袱となして安永二年耕雲寺へ寄附したり



堅三尺九寸

二代高尾衣服卓袱

表緋繪子紋紗綾形文様丸の内を白く染ぬき平假名の文字有回りのふちは金縷をもてぬへり文字は墨にて出たる上をいろくの絲にて縫たり丸に大小ありたま〜菊の折枝を縫たり二代高尾は下野國下塩原塩釜村の産にて父を長助と云子孫今に數ありとぞ代のうちすぐれて名妓のきこへ高しこれを万治高尾といふ万治三年十二月廿五日死或云万治二年十二月五日死と高尾の名十一代までにてたへたり十一代高尾寛保元年出郭其後高尾なしと近世奇跡考に見ゆまた三浦屋も寛曆六年家たへたりしを近年ゆかりあるもの再興と云々



万治寛文の頃女の衣服に丸盡の文様行はれしとなん是をもて其頃の風俗もおもへは今の風俗とても百有余年の後にはめづらかに思ふ事の有へし

野茂利

寛曆の初中之條村の吉左衛門と云者夏の頃千隈河の邊なる支流を起る時に忽物あり水中より出て矢の如くに飛來り然として兩脚に纏ひ翻て頭を擧口を張目を瞋し將に喉を嚙んとす吉左衛門急に其兩耳を捕へて呼喚ふ其邊にて斬草男子鏝を提馳來るといへども怖て近づく事を得ず吉左衛門其鏝を借ければ振上げて投たり走りて鏝を取んとすれとも行事あたはずこゝに一箇の柳株あり地を掘る事一尺許其利恰鈍双の如し即其頭を株に貫んとして從容として時を徒し漸にこれに貫き解却して逃去其長五尺はかり背は鐵黒にして腹は朱の如し四足有て龍盤魚に似たる此物は臭氣甚しく吉左衛門か身に移れり臭氣年を経て失さりしとなん

雨宮 狨 踊

雨宮山王の神事は相傳往古雨宮攝津守清野山城守兩家の鎮守にて其頃よりの風俗とかや例祭四月中の日三ツハ初甚古雅なる神事也先祭の前日朝神前にて揃の踊ありて森村の福透院に行此寺に雨宮清野兩家の木主あるゆへ也森倉科生萱雨宮の四村は方例にて舊家に至てをとる翌日は朝またき神前にて足揃の踊あり夫より松代にいたり海津城内に入て踊る是はむかし清野氏のや

しき此所に在 如此て由縁ある寺に二三所に至り清野の倉やしきにて踊り又岩野土口等に舊家に至りて踊る家は神酒を造りてしゆへ也とぞ  
 いた雨の宮に還りて神輿を鳥井の下に安置し神事の人數前にならび居る申の刻に矢代の山王の神輿雨宮の裏道を通り鬻固の武者甲冑馬上にて道傍の一石を射る 此武者出立のうち一人一つものといふあり紙の笠に山鳥の尾一本を立平年は矢代より出陣のある年は雨の宮より出る 楮雨宮の幸崎明神の神前に至りて神主奉幣すそれより神輿は雨宮へ還るに鬻固の武者神主二斗五升と號るもの皆馬を馳て通るかて雨宮の神輿村端の濱名の橋と云橋の上に留置獅子の頭に蠟燭を立橋の四方へ下りて躍り獅子頭の紙を取て川へながすそれよりから崎明神の神前に至りて神主奉幣例のことくをとりてかへる神輿を本社の前に安置し皆々踊りながら三反廻りて本殿に鎮座なし人數も引とる也  
 祝踊人手替ともに

祝踊圖



矛物二人 行夏六人  
 左中 社宮司六人 左大人六人  
 左末 正相六人 飯繩六人  
 右中 供正相六人 右大人六人  
 兒踊八人 鐵持二人  
 左末 寶珠獅子六人 陽獅子六人  
 右末 陰獅子六人 陽獅子六人  
 唄揚十人 笛吹十人  
 大鼓六人 注進張二人  
 輿附鏡研八人 轆立八人  
 武者六人 武者六人  
 松代踊案内二人 矢代迎六人  
 人 矢代駕與丁四人  
 花笠張二人 獅子張四人  
 御城内 踊案内十人 下駄持一人  
 團扇張一人 矛持一人 長刀持一人  
 輿附一人 四箇村警固八人 鳥居前警固二十五人  
 同 踊唄



「みたき見る、精進の御班注連、引やひて、七重も、かされてそひて、川きしの、根しろの柳、あらはれて、いつかや君の、枕さためん。」

「江の島は、いかなる神の、誓にて、浮たる島の、流れさりけり。」

「遠江の、濱名の橋の、下行は、漕かや船に、はやくこきそろ。」

「あれを見ま、これを見よ、つしまの神の、漕舟は浮とはこがて、あとへとそこく。」

小おろし

「祝なれば、申なり、とう／＼から参りた、丹後但馬、阿波の國から、参りた。」

「地頭殿の御前には、とうとこそ、十万人のとうとこそ参り、ととと治めた。」

「地頭殿の御前に、小ならの柴をな、万山さかへの、こならの柴をな。」

「地頭殿の御前に、しろかきそろうま、九十九疋おろして、しろかきそろうな。」

「地頭殿の御前に、我早乙女は、さいたては何もよし、扱はこかひよし。」

「地頭殿の御前に、稲は、いかやうなる、千つけ万つけ、よみ入り、とにとうを納た。」

「地頭殿の御前に、ほしむらの稻三三把に、米八石な。」

「地頭殿の御前には、からのするすはな、稻三石三斗、米おろへて、からのするすはへな。」

但神前にては山王様の御前にと唱御領主の前には地頭殿の御前と唱ふ

「これはかりて納るに、かくのみかきはいな、みくらの戸をあけて、俵つまふ。」

「秋の田のかきわにゆけは、下葉なる、露にも神はぬれにけり。」

山 鳴

清野村の山上に古壘あり倉科の地にして鞍骨の城と云天文の頃倉科左衛門これに據る此城跡に穴あり徑四五寸深き事幾はくといふ事をしらす此邊那色天雨降んとするとき山の鳴ことあり其音遠く響て雷霆のといろくか如もいかなる音といふ事をしらす疑ふらくは此穴より音を發するなるへし然るに其音遠く聞ゆるといへとも其地にては聞こえなしといへり

大明一統志曰山西平陽府鳴山每天欲雨則此山颯然有聲又曰福建興化府有鳴山山頂有風穴天將雨則鳴其聲隱然若雷怪異辯斷曰山鳴の事皆地中奮氣の所爲也

地中に空穴有て奮氣吹發するに因て聲をなすもあり又其地の總體陽氣厚く鬱伏の氣常に有て陰氣と擊して鳴ことあり雨天に必有聲ものは土中の鬱伏の氣雨の陰氣に感發すれば也怪にはあらず云々

土 鏝 子

寛永の頃松代の先侯千隈川にて手つから網を引給ひしに土鏝にして圖のことくの物網に掛りたり是を藩中の鈴木氏に預給ひたりしいかなる物とも名状すへからす只名つけて土鏝子といふ鈴木氏園中の小祠に納置とぞ

土 鏝 子

惣色さび鏝色重  
ミ石より輕し

高三寸七分  
横五寸五分



蓋の如き物上下に  
つきて有しが後  
はなれたるよし

御安紅梅

松代の東につゝきて御安屋敷と云所あり是より町の入口を御安口と云里諺にこは昔東條に雨殿の城主何某といふ人あり建久八年四月右大將頼朝卿善光寺に詣給ひし時彼某世を去にしかは其後室阿安といへる息女を得て謁しける此女容良美麗しければ右大將鎌倉へ具して嬖妾となし給ふ夫人政子の前は嫉妬の心深く御側仕の女の懐妊の事あれば人に殺させ給といふ事を聞く阿安の前は心にもあらぬ月日を送りながらも庭に紅梅の咲るを愛て實をな結ひそくと唱へしより此梅實を結はずといへり彼遊女久乃乃か都の花もおしけれど、詠しも身の上と思ひしられて只故郷の空のみ慕はしく一向に暇を乞事屢也しか正治元年頼朝卿薨し給ひしにより歸る事を得て海津の東南に別荘をかまへ閑に世を送りしとかや又其梅をも根掘來



頼朝善光寺  
ノ事ハ歴代諸  
考大成古今著  
關集加賀一書  
次第等ニ記載  
スレハ撰ナキ  
也

れるにやまなき後にても花は昔のおもかけにて阿安紅梅と書傳へたらんを年経るまゝに讀たかへて其跡をは御安屋敷といひ梅をは御安紅梅と呼ふとかや此梅に尋常の紅梅よりは色淡くして若木にても花は老木の花の如し今も實は結はされは其枝を接て今諸國に廣ごりて御安紅梅ともてはやすものは此梅か枝の分離したる也

此地に今は藩醫立田氏の家ありて梅齋と號す古梅はいつか枯朽して若木のみ也此地の東皆神山に熊野權現の祠有圭田百余石別當修驗和合院此庭に老梅あり雨殿何某の墓は東條にありて石の五輪かずと並へり又御安屋敷の通荒町村の上に御安御前の守護佛とて梅の觀音と云ふあり別當修驗紅梅山梅壽院御安寺といふ  
按に頼朝卿善光寺詣の事東鑑に見へす扶桑見聞私記に載るといへとも此書は證とし承たし彼地頼朝山十念寺又は頼朝卿所跡或は中の御所醫の觀音など舊跡を云所もあれは御詣の催しはありてかゝる殿の跡にや

更科郡之部

姨捨山

姨捨山は更科郡なれば更科山更科の里更科川ともに月に名たる所と也しは古今集の歌を始とす其所の縁起には神代の事に書なしたれどこはいかたる好事の手にや出けん大和物語に信濃國更科といふ所に男住けり若き時に親はしにければ姨なむ親の如くにあひそひてあるに此女の心さかなくして此姨をにくみつゝ□りてもて出して深き山に捨て給ひてよとのみせ



めければ月のあかき夜かきおひて高き山にみるくのぼり捨置て逃きぬさて家にきて思ひおるにとし頃親のことくにやし  
なひつゝあひそひてありければいとかなしく覺へければ此山の上より月はいとあかくて出たるを詠めつゝ夜ひとよいもね  
られすかなしく覺ければよみたりける

古今 我心なくさめかわつさらしたや姨捨山にてる月を見て

とよみてなん又ゆきて迎返して來にけりとかたりつたへたり 摘要

顯昭袖中抄俊頼無名抄にはむ

かへて歸らす趣は同し事出

但無名抄には人のめいを子に

して年頃やしなひけりと有

人の考にをはずては姨すたる

なるへしすたべは下部にて

すとしとつ 葬地を云久老の信

濃漫録に下部は萬葉玉の巻の

事か死をかなしめる歌に之多

敵の使於比豆とほらせと見へ

て地下黄泉を云也云々たべを

つゞむればととなるをもてを



姨捨山

古事記云此山名

月夜

人

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く

ふ

く



姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

姨捨山

はずて山とはよみしなるべし  
如是ならば壽に姨を葬たる山  
に月の澄るをみて昔をしのび  
かこつ光景哀れもふかく聞ゆ  
めり然るに大和物語にあらぬ  
事に作りなせしよりあやまり  
つたへて不幸の名を負する事  
にはなり侍りし 顯昭云大和物  
うたにもとつきて 語は古今集の  
作れる物語也と

古歌に 賢は勝母のさとも過らねと

月に愛ては姨捨のやま

かゝる歌など大和物語袖中抄等によりて會子の勝母の國の不幸の名をにくみて其地を通らすといふ事を姨捨の文字に  
へてよみし也

契沖云姨を捨し其夜その山を姨捨とよみしもおほつかなしと按に此山の上より月はいとあかくて出たるをといひ中頃の  
歌に 姨捨の山より出し月 なくよみしはとも地理をしらするゆへ也此山は月の出る山にあらず西にありて月の入る山也

鏡石は高さ五丈余横十間余石によりて庵を建つ放光院長閑寺と號す満月殿二間四面本尊二尊正觀音勢至觀音は手に桃を持たる像也因て桃觀音といふ鏡捨山の扁額は佐々木玄龍筆二十一代集の和歌四十首の額あり庫裡三間半二間月見堂といふ此所より見涉せは向に鏡臺山あり左に八幡あり千暖河南より流れ來り月滿て銀蛇の踊るか如し

冠ヶ岳 鏡臺山 有明山 一重山 鏡石 甥石 姪石 小袋石  
更科川 田毎月 桂樹 賣ヶ池 雲井橋 以上是を俗に十三景といひ成らはす一重山其邊にては一夜山とも

今も仲秋には諸方より盛人風客此地に杖を曳鏡石の上に集ひて詩歌俳諧に風情をのへ終夜月を賞する事毎年にて許多の水菓の跡車に積は牛も汗すべし

醫人 穴熊

古へより名高く聞へたる人々の談草とも長櫃に合あまれりこは神定寺の文庫に納む

八幡の里に原田見智と云醫師あり平生貧をあまんして妻も有女子一人あれとも甚も乏しく三間の茅屋軒端は地につく許なるに一ツの戸口をあけ土間に葉蔭敷なみ人來れは一枚の關席をしく火地爐は土を竈めたるはかりにて爐傍もなし家財は鍋一つのみにて湯すれば水を存朝夕の食物四ツ合器も揃わて塩さへとほしく着る物は染色なせる事もなく白布のまゝに調して着替とてもなく全然にて何所へも出あるき道遠き病架へ招かれ行ときは脚の依を馬に負せてそれにうち乗てそ行ける鼠村の公菴たま／＼訊行て談論するに記すへき事は不用の冊紙を裏かへして瓦の缺たるを竈めて墨すり 柳枝を嚼て筆として書記せしとなん如是も貧しきは如何なる故とそ尋るに此翁つねに書をよむ事を好みて得る所の金はみな書籍にのみ費しける其書馬に負さは十足にも餘りぬへし其價の金は二百金余に及へりとそ一ツの土庫あら／＼しく手つからしつら

ひ其中に書を籠置て身も籠り居て雜客に遭されは人皆穴熊とそ號しける本紳家にて同の鼻には菜蔬は植すして藥艸のみ也此人に付添居る妻子の心こそ想像れたり文政三年七十有余にて終れりとそ

白鳥山什費

白鳥山康樂寺は西原嶺時 報恩院と號す開基西佛師は遊野親王の後胤海野小太郎幸親と號すの男彌平四郎幸廣の兄也初勸學院文章博士と也藏人通廣と名つく出家して西乘坊信教と號し南都興福寺の學侶たり治承四年茂仁親王の令旨を奉て平家追討の返翰を書清盛は平家の鷹芥武家の精髄と云句あり清盛後にこれを聞て大に憤り殺さんと欲す信教遁て當國に下り木曾義仲に仕て大夫坊覺明と號す義仲哀て後信州に隱又箱根山に盤居す建久六年比叡山に登り慈鎮和尚の法席に列り名を淨覺と改む時ニ範實人幼名 同寺に在寄て範實の性凡ならざるを感して隨從す範實吉水に到り源空上人の弟子となり名を緯空と改む淨覺亦相從名を西佛と改承久元年親鸞上人 越後に請せらる貞永元年に至り歸洛し給ふ其始終毎に陪從す文應元年師命によつて信州に來り法を説かつて覺師の行狀を記し淨覺に授く仁治二年正月二十八日寂す時に年八十五才覺上人より年輪十六才長たり

弟彌平四郎幸廣も木曾義仲に屬し壽永二年十二月三日備中水島合戰の時副將たり平家の大將能登守教經と大に戦ひ武勇をあらはし討死す

淨覺行狀記を以て覺如上人に呈し繪圖を加へん事を請覺如淨覺と關東北陸は舊跡を廻り永仁三年繪傳成四軸有畫は法眼淨覺二代 傳は本山三代覺如上人の筆

覺上人遺物 半製東珠數 鳩之杖 一節截 羅扇 其外什物多し 畫 法然上人色形像 一説に火葬の灰をねりたる像なりともいへり

建曆二年上人八十才にて遷化遺骸は京都東山大谷に納む十五年の後南都北嶺の衆徒蜂起して曰今天台止觀の法水流遠して四海念佛門に飯する事ひとへに法然の故なれば死骸を掘出し加茂川に沈めんとす其頃上野國より出しなら一の律者定相と云者上人の選擇集に破文を書て驛選擇と名つけ上人の弟子隆宣律師へ送る此付歌選擇と云書を作り定相か難破を覆して曰汝か破文の中らざる事暗天の飛磔の如しと定相いよ〜憤り三千坊の衆徒を引率し嘉祿二年六月廿六日大谷の廟へ押寄る時に宇都宮彌三郎頼綱入道實信房二百余騎を率し急ぎ駈付大衆を諫むれども閉入す詮方なく終に合戦に



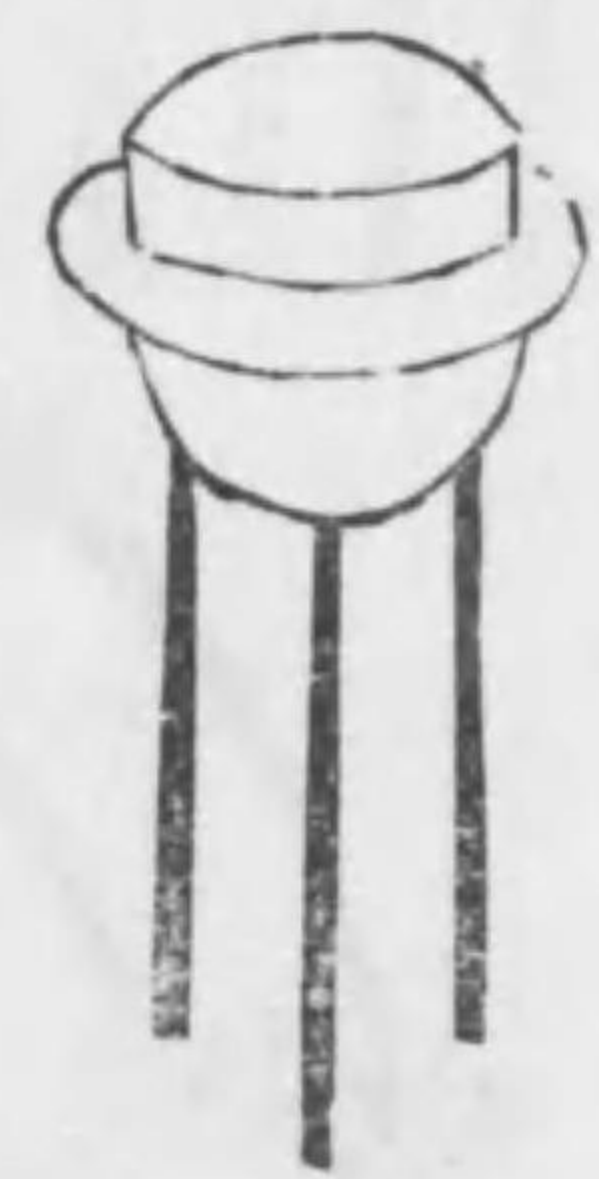
法然上人色形像 一説に火葬の灰をねりたる像なりともいへり

及ひし所北嶺の衆徒敗北す其夜墓を開き棺を嵯峨二尊院へ移す然れとも山門の徒おたやかならされば太秦廣隆寺來迎坊へ移し翌正月衆徒ありて廿五日粟生野光明寺にて荼毘す其時棺を開き見るに 聊 損翼なく遺骸生るか如し是に少しも違はざる様に一夜に像を寫し刻さみ色衣に彩る上人生涯黒衣の外を着給はす弟子中尊敬のあまり遺骸に色衣をおほふ其姿を寫したる故に色形の御影と稱す又此像をも奪取へき沙汰なれば都近邊に安置する事ならず幸西佛法師は上人の御弟子の事なれば此寺へ送らんと畫は人目を忍ひ夜なく供奉して康樂寺へ移せり猶委しき事は正源妙儀抄か九卷目繪詞傳四十三卷にあり從願このかた塩崎に安置の年來文政十二年まで六百三年日本一鉢の像也



古器物

河中島千隈の邊は砂地なるゆへにや牛房葉の長する事他に勝たり中にも葉類なく地に入て深くほらされは採得事あたはずこれに依て古物を掘出す事數度あり文化のはしめ塩崎村の土中より陶器數品を出す鐵類は多くくされたり  
扶桑畧記曰光孝天皇 仁和三年七月廿日信濃國大山類崩山河溢流六郡城廬拂地漂流牛馬男女流死成丘云々千隈河六郡にわたれば其時の洪水に埋れる物なるへし



足三本長サ二尺餘  
重 十四貫匁  
水五斗入



足長二尺三寸  
重 五貫匁  
水五斗入



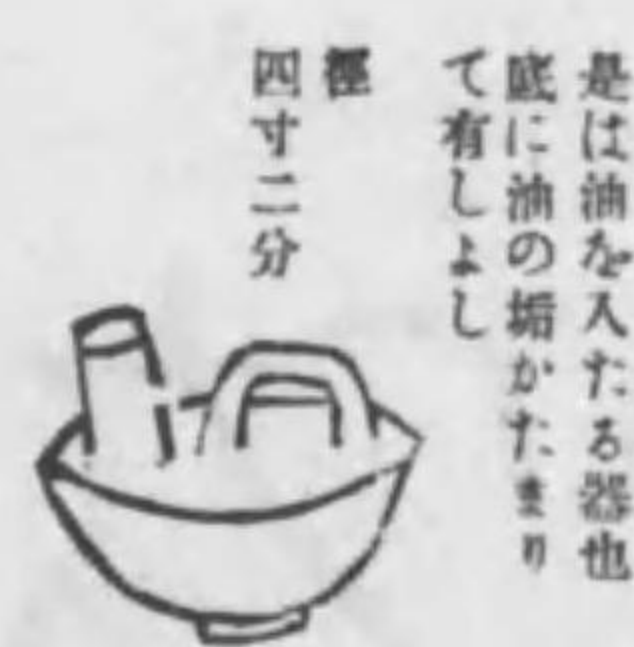
此器瓜の如く枕の如く轉ふ也水を入れは直居す白く灰色の石燒也外きや形中に波の文あり兩方ともに丸みの中立葉の形有口はかけたり一ツハ全し水五升を入



一尺三寸  
何れも素燒



一尺六寸



是は油を入たる器也底に油の垢かたまりて有しよし  
徑 四寸二分

玉髓

石川村の山中に玉髓を生ずる地あり土中に初るかたち細なる文理ありて種々の如く蜂の房の如くし數年に經るにしたかつて次第に大に也四尺余にもなれり是を破れば中に種々の玉髓あり大なるに奇少し小なるに奇品有こと有みな一様ならず千變万化せり此山諸方より人多く入こみ所々堀うかちし故に地主より禁して今は人の行

古銅器玉石

石川村の山によりて將軍塚と稱する塚あり享保二年土人塚を穿けるに種々の玉石銅器出たり  
俱重の文様二十七品大小あり大なるは高麗文字同勇たる人の形五三人あり唐銅にて鑄物の如し銀銀四分一の如し



此器二箇  
金銀七  
口徑一寸  
但金銀着せ物也  
下地赤銅大小あり

此穴三つトモにすかし  
長 三寸五分  
外一箇は形少く別也



長二寸七分  
巾九分斗 込七分斗



此物内に有振は鈴の音有唐銅にて銀色四分一の如し古代の鈴なるへし



數五合斗  
此玉瑠璃色  
びいどろ燒



青石  
此兩方かけ口筋にあらす扇の地紙の如くきたあり大小あり



此穴下は不通  
數一箇形掛物の軸の如く石質堅實  
長 二寸三分

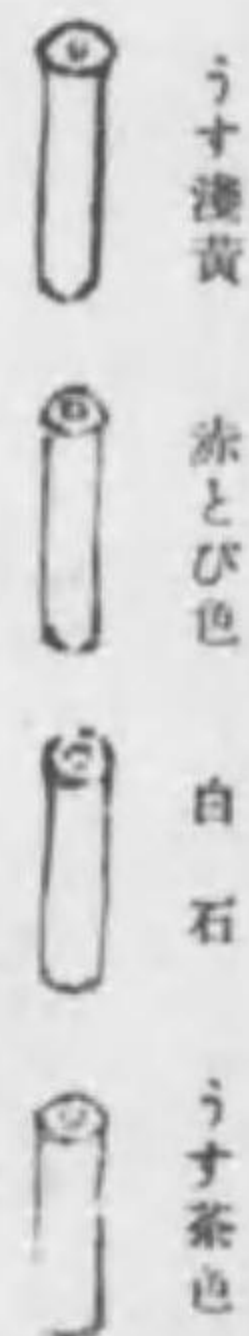
之ノ行下ニ脱文アルベシ



此處に穴あり向へ通る  
高一寸三分 一箇  
青石にて磨の齒の如く平み也



此穴通り有  
蠟石にて上に同一箇



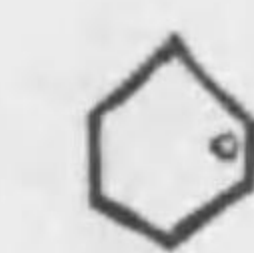
うす淺黄 赤とび色 白石 うす茶色  
淺黄處は練也其外淺き石青  
石青練あり數七百本餘  
此管長一寸より四五分迄迄  
至て削きあり



數三合斗 翡翠黄色  
びいどろ焼



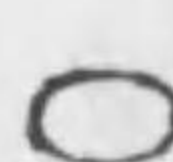
數一合斗 水晶也



此穴先へ通  
數二箇 蝟石



此穴通  
數三箇 めなう水晶  
水晶は形六角也



數三箇 練玉あり  
かんろく有  
各化して出



三ツ けり玉  
かんろく



青石厚二分  
徑一寸三分



ニツ  
びいどろ焼の如く  
色は薄るりの如し



數一ツ  
此曲玉翡翠の  
石也又至て上  
品有すいて見  
ゆるもあり



二寸斗  
ありの  
曲玉



一水晶

此外白瑪瑙赤めなう同黨陸崩黃玉青石の玉蠟石玉至て上品の玉有黨陸の外三十余右の塚穿たる時寄集たる人塚を穿たる跡

を亦堀くすし拾ひ歸る者數不知となん

### 河中島古戰場

河中島は埴科更級水内高井の四郡に亘て統云名也埴科郡兩の定に向て横田川原あり昔木曾義仲と平家の方人越後の城太郎と合戦ありし所也

東鑑云壽永元年十一月九日越後住人城四郎永用相繼兄資元跡欲奉射源家仍今日木曾冠者義仲引率北陸道軍士等於信濃國筑摩河邊遂合戦及晩永用敗走

甲陽軍鑑武田三代記等に永祿四年九月九日の夜甲州勢川中島に押いたり犀川より一里東の方三枚畑越後の引口に備ると云は非也

三枚畑ハ大塚に有て場所大に相違其時の戦は東福寺中澤より始り荒堀村淵水澤此邊大戰也夫より八幡原陣場河原別て烈しき大戰也陣場河原は中水鏡より八幡原より信支家弟武田典厩信繁典厩は左馬右馬の唐名也信繁は左馬介なれば典厩と云西の方に石碑を立左右に松を植たり此所戦死の所にはあらず骸を火葬したる所と云

駿臺雜話に云武田信繁其子を誅られし條別かきの物を見侍るに一として恭敬篤實のことにあつからざるはなく云々其高風清節古人に恥さるへし云々

此寺元來瑠璃光山鶴巢寺とて眞言の寺なりしか悉荒壞に及ひしを松代の長國寺五代目の住職大承和尚修補して信繁の法名松操院鶴山巢月大居士の牌を立曹洞の宗派となりて松操山典厩寺と改む水鏡村は嶋田村の間塔の腰と云所に諸角豊後守昌

清の塚あり此地すなはち戦死の所也 又一丁半を隔て東西に大礮のとらか墓 小嶋田より水澤の間に八幡の神祠あり此邊は八幡原といふ山本勘介入道道鬼此所にて戦死す首と胴とを合せたるとて胴合の橋といふ橋あり  
 山本か家巨大佛庄右衛門入道學心諱早佐五郎入道了碩何れも長刀かむこみ其外與力同心前後左右に引そひ北國方の本庄北條飯森か勢の中へ亂入て戦ふ山本入道九ヶ所疵をうけ此時柿崎和泉守家臣萩田與三兵衛吉江喜四郎川田郡兵衛坂本磯



八八方より鎗にて突掛り勸助をつき落し首を坂本磯八とる山本か郎等とも入道殿の首敵に渡さんは無念也と十人はかり命限に踏込戦ひ法師首取戻して元の所へ立歸るこの中大佛諫早兩人の法師道あり顔は血に染相は變して何れを勸助とも分らず是故に一人骸を尋て持來り胴に首を合て見るに實の首漸に知れて川澤の河端に一ツに埋めたり其後満水にて川筋崩れ昔の塚は今の川中也寛永の頃芝村の高畑塚をつき又甲州流の學士原氏石碑を芝村彌陀堂の庭に立また近き頃高畑



にも碑を立千丈の銘あり曰

其身雖レ没有不没者、其身雖レ朽有不朽者、嗚呼道鬼也哉

初鹿野源五郎戦死の場所ありて塚なく又小嶋田の内八幡原の傍に七太刀三太刀といふ所ありて此地信玄謙信出會の場所也  
又兩軍勢討死の首塚數塚有古は數多有しか田畑に發て今僅に殘れり廣田村の東に狐塚と云有小笠原伊豫守を埋めし所と云  
八幡の道の傍に一條右衛門大夫信龍の塚と云あり

山本勘介晴幸遺物ノ笏ノ圖 松代藩中小幡氏家藏

所 長一尺四寸五分 徑九分一リッ



存 兼天下 經 寡 孤 獨 嗚 呼

所愛者有罪必罰所憎者有功必賞

如此兩面ニ彫付アリ

河中島を行に民の家に秋收めすとて唐箕といふ車おどろ／＼しく鳴らしたるにそかこへ鼓の音すさまじかりしいにしへをおもひ出て  
板をふく箕の手の備へたてかねつ車がりの風のつよさに 眞 顔

バカ火

川中島の西にバカ火と云ふ事あり三月下旬より四月五月盛に出る小雨ふる夜はいと多し小松原村と分島ふりまの且またの原の間より出る常の火の如くちら／＼と縦横に燃て近つくととき聲を抗されは近く來り嘔嗽くはせするときは忽消て遠向ふに三ツ四ツに見へ又一ツに也て燃る也

本草綱目田野燐火人及牛馬兵死者血入レ土年久所レ化皆精靈之種也其色青狀如レ炬或聚或散來通奪。人精氣。

高井郡之部

保科

保科は高井郡郷名五ヶの一にして今七村あり保科七郷といふ  
源平盛衰記に云壽永二年五月加賀國越中境俱利加羅岳源平對陣信濃國星名黨有對陣。又東鑑に元暦元年七月十五日保科太郎頼朝公に屬し云々此保科太郎と有は大系圖に井上太郎忠長と有者是也又曰文治三年二月二品三浦介義澄か亭に遊て聖曲を聽給ふ時保科宿の遊女の長訴ながうたの爲鎌倉に在今日彼遊女を召容貌あり且舞踏詠歌に絶たり云々  
京都南禪寺の開山大明國師妙心寺の開山關山國師ハ此保科の産也本國より四國師英産あり其中二國師は此地より出られ

しも奇也所謂四國師は○法燈國師元享釋書に云名覺心姓ハ常澄信濃國神林郷の人云々永仁六年化筑摩郡神林の産なるへし ○大明國師名普門號無關延寶傳燈錄ニ云京兆南禪寺無關普門國師姓源氏信州保科の人云々東福寺聖一國師の法嗣弘安三年渡海正應中飯朝四年冬化歳八十號佛心禪師 ○關山國師名慧玄延寶錄云京兆正法山妙心寺開山惠玄國師世姓源氏信州英産也と妙心寺の記には信州保科高梨の孫と有よし紫野大徳寺の大徳國師の法嗣延文五年冬寂八十四年賜佛心覺照禪師賜諡本有圓成國師

清水寺

○矩庵南院國師同錄ニ云名祖國姓不詳信州長地ノ人佛光國師の法嗣南禪寺の二世也長地は水内郡に在

此地の清水寺は京都の清水寺と時を同すといふ本尊千手觀音長八尺甚古たる物也堂は乃田村丸の建立といへり傳記に曰桓武帝延暦二十年田村將軍東夷征討の時願心に同て大同元年當山に七種の殿堂三層塔三十余の神社三



十三の僧舎を建立して阿彌陀山護國院清水寺となつて許多の田山を供修の資縁とす其後兵火相續て諸堂田山過半散滅す今に存する所三堂あり奥院觀音堂千手大士中院彌勒堂三重塔金剛大日四方四佛是也その餘藥師堂二ヶ所關慶堂經藏念佛堂釋迦堂十箇の小祠等は後に建立する所也云々

此觀音堂の上には八所權現の小祠あり其内に古き鉄形の如き物三枚ありしか何時の頃にか二枚は失てなし今一枚ありて清水寺の庫中に藏す

廣徳寺は圓覺山佛陀院と號延徳元年保科彈正正利の開基先住楚賢和尚鐵石を多く藏せり俚言に往古保科彈正惡星を射落し星塚を築く以來其邊に鐵石ありこれに因て古は星名とも書しといふ

和名鈔には種科と有保科星名等は假字也此石鐵白色にして星鎗石の如し星鎗一に落星石といへは星無の借字にもとつきて設たる俗説なるへし又一説に保科家立九曜の紋は此星塚の因縁より出たると云傳ふ





墨坂神社の寶物に瓜石筋石圓飾石として三石あり瓜石は形越瓜の如く黃白にして黒き筋あり肌滑にして潤澤有もし黒筋ならんは眞物にもまかふへし



松皮琴囊

須坂の老臣駒澤氏は清泉と號し平日琴書を樂んで倦す所藏に松皮の琴囊あり此物は山田といへる所より出たり其地は極山中にて耕作の地少く農民多くは山に入柚木を取て業とす爰に幾千歳を経しともしらぬ松の木あり其本十七圍有て自枯たり甚大木也といへとも材木にはならず是によりて短く切とり剝て屋根の葺板に販へしと柚人五六人催し其地に小屋をしつらひ居てこれ切るに皮と幹との間に色白く軟にして哆囉絨の如く革のことくなる物あり是を廣く取て席物とし又は頭に被て風雨を凌ぎなしたり數月其地に住居して事終ければ家に歸る時此物破れ穢かるはみちろち捨て歸りぬ其後五年はかり過て駒澤氏此事を聞その松皮を尋見るに惜哉持て歸りし者少し漸一枚と少しつゝの切端有しを取集て江戸へ賣し工人に命して琴囊を縫しむ工人も舶來の獸皮と思ひたりしに松皮なるよしを聞大きに驚きまことに千歳の奇遇也と感賞したりと也其頃しも京都



の蘭山大阪の兼葎堂も江戸に居會この物を見て曰千歳を経し落葉松に天然ありとは聞といへとも見る事は今日初て也朝鮮の樟皮と大同小異也暖皮に稱て宜かるへしいつれ希有の奇品と賞したり

東部の桂川氏もこれを見て實に天下の絶品金銀威勢にて及はざる物也と賞したるとなん此囊に入置所の琴も又宗朝の古琴にて勿論斷紋あり牛毛斷也 斷文は漆の 剛痕を云

一目獨體

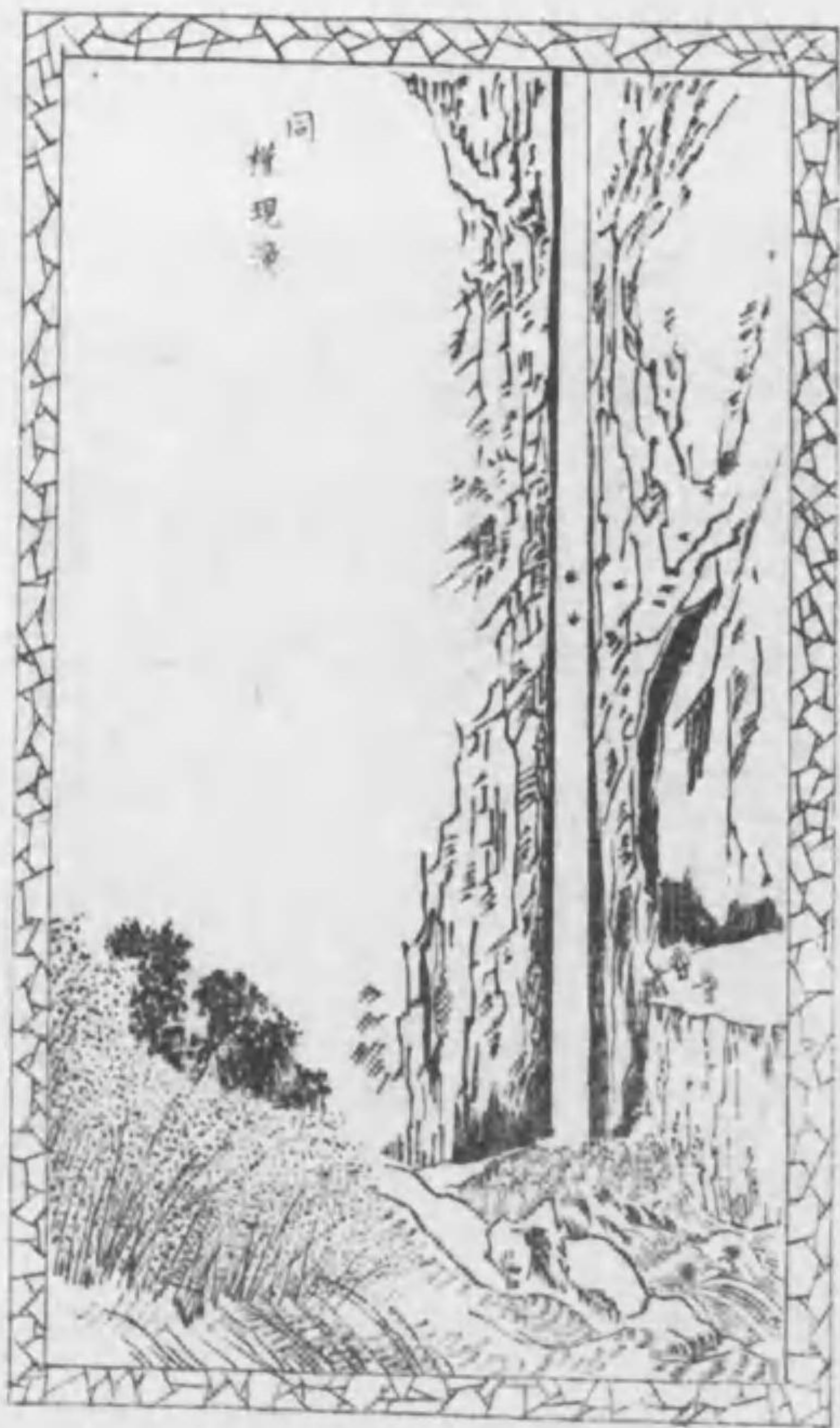
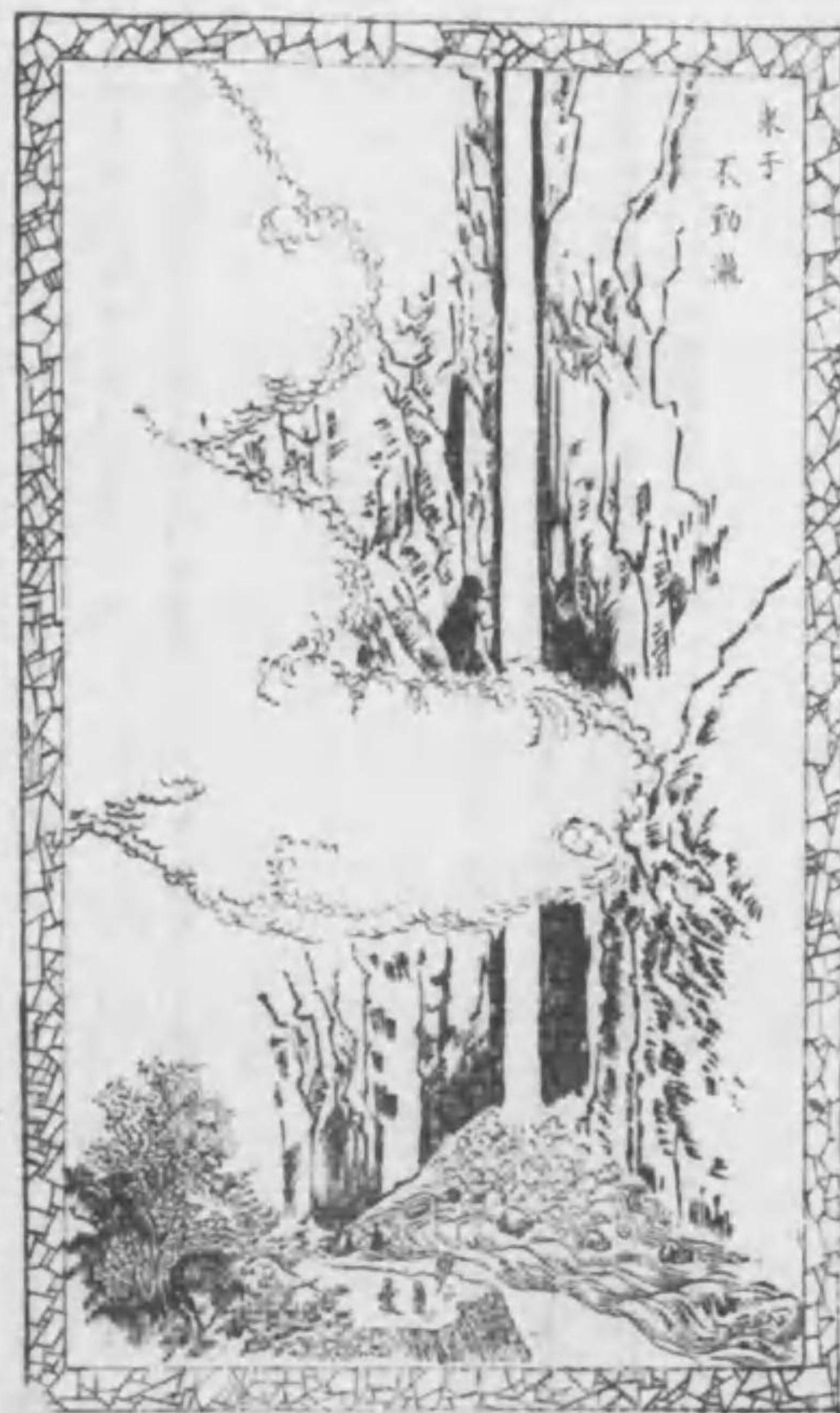
須坂の普願寺の近邊に一箇の塚あり上に樺の朽たる株ありて其下を穿たりしに奇なる骸體ひとつ出たり兩眼の痕は竝く形有て穴にあらず其中に小き竅あり顔に如此の穴一ツあり是眼の跡なるへし尖りたる骨數々ありて榮螺の如く多の脚大怪物也とて打碎んとせしを寺僧みてこは鬼類の頭なるへしとて宮に收て庫中に秘し容易人に見せず予文化十二年五月其地に遊ひ田中氏の許にて密に見へたり上顎のあたり鋒骨抜々として最もあやしき物也若かゝるものゝ生て出る事あらはいかなる禍をかなすへき 略之 一説有

出雲風土記曰昔或人大原郡阿用郷作山田子レ時目一鬼食二個之男所食 男云阿欲々々故曰阿欲之神龜三年改字書阿用

米子瀑布

須坂より米子へ一里半此所より山にいり谷川を沿りて行こと三里にして數百丈の峻巖峙たる蒼天より直に落る大瀧二箇

あり此瀧の麓二三丁はかりにして聲を抗喚あひよときは忽瀧水雨の如く降來るこれを迎ひ瀧と云歸る時も同じく聲に隨ひて躡おひ來るを送り瀧と云南の方は不動瀧とて高さ九十丈此の方は權現瀧とて高さ七十丈といふ何れも岩壁をはなれて落する其音山谷にひゞき夏日の天寒冷として肌膚粟あせ々たり二瀧の間一町程隔る瀧の右に不動堂あり常に人蹟なく六月十三日より十五日まで諸人參詣す土人は自負おこて那智瀧も見と爲しかたしといへりまことに奇絶の瀑布也されとも里はなれの山中なれば六月の外見る人なし惜むへし



又此所岩燕甚多し不動堂の軒端に透間なく巢くひてありまた瀧のほとりの岩壁にも巢多し水烟の中を縦横に遊ふ常の燕より少し大きにして腹に黒点あり圓のことし多く白燕也此米子より硫黄を出す名産也硫黄は鷹の目といふを上品とす鶴のめといふを是に次くにして火うつりさとき事をほめてかくいふとかや

物語の詞にうのめたかのめめさともうつり給ひて云々

飯森松

大熊の里大圓寺宗の後背の山の尾崎に老松あり根本四尺ばかりより数本に分れて枝葉しげくはびこり東西の谷に垂れ下りて徑二十五間といふ上は高く榮え枝々縱横に延びめぐりて壯觀いふはかりなし其狀飯を盛たる如くなればとて俗に飯盛松と稱す



無縫塔

澁村の横湯山温泉寺の草創は相傳嘉元三年虎關禪師上條の善應寺に掛錫して田中に入湯の暇此の温泉を尋て草庵を結ひ後に温泉寺と號といふ諸宗の僧侶代る々住して後弘治二年節香禪師入院して曹洞の宗派となり禪師を鼻祖とす此寺の門外に早川といふ流ありて亂石磊落たり温泉寺の住職入寂近よる時は自然石の無縫塔流れ來るこれを墓所の印とする也代々の



住持の石塔寺の後山に十四五並  
ひ立てり此川の源は香野の奥大  
沼の池より流れ出る此山中に岩  
倉大沼琵琶池の三所を本として  
四十八の小池あり永正三年龍蛇  
出て水かれ今七池あり又天文七  
年八月の事也ともいへり岩倉池  
の龍蛇高梨家の息女に掛想して  
不叶其仇を報ん爲に水災をせし  
と土俗いひ傳ふ 高梨家の第宅の  
跡は中野の東山  
あり 大沼は徑十四五町寺より  
此地まで四里余あり流れ来る石  
塔住侶の意に叶さるときは人夫  
をして川下へ送れば又のそみの  
如き石流れ來ると云傳り今は此  
石流れ來るときは住持隱居すと



いふ北越河内谷の陽谷寺にもかゝる事あるよしすへて此説の如しさて此地の山際は何れを壩ても温泉出る也村裏に數箇の  
湯槽あり人家にも内湯あり寺の浴室も温泉也常に諸所より湯浴の人絶して賑へり又此所より十四五町許流に沿て谷に入  
は所々より温泉の吹出る所ありこれを荒井河原の六地獄ともいふ笛吹地獄といふは岩穴數ヶ所より湯の湧出る音笛の音の  
如し又小鉢の地獄といふは釜中に湯の熱か如し小便地獄といふは高さ四尺許に細く湧涌る其外鍛冶紺屋等の名あり血の池  
といふは池にあらず小流の地洩黄赤にして土色最見事なり此地獄と號する事は越中の立山奥州南部の怖山肥前の雲仙か岳  
に温泉多く所々に池水沸溢る色に隨て其名あり此地の地獄といふもこれに倣て名つけたるへし又三四町上りて大地獄とい  
へるは溪流の側より噴噴より水の増るときは流水和る故に其勢よはくして六尺ばかり吹上る早にて川水潤るときは一丈余  
も上る也又人あまたにて手を拍隠くときは水勢益強く湧出て二丈も高く沸騰泉氣烟の如く立登り其音地に震落て凄しき光  
景也又大沼の池の邊に火の地獄といふ池あり常に火あるにあらず池中硫黄の氣強く泥水熱るが如き上に枯茅をかさすと  
はこれに火うつりて燃るも奇なり

彌勒石

澁の下田中の間金倉といへる所の北端山の麓に高さ五尺許横三尺余の石面に  
佛像を刻めり彌勒石と云多年風雨に濡れて文字半は湮滅す温泉寺の記に大治  
五年極月十日と有今は石上に小堂を立て風雨をしのぐ



雌垂雄垂

木島の上山根によりて部屋澤といふ里あり此地に岩石峙たる瀧ありこれを雌垂と云又其下に三間はかり間に落る瀧を雄垂といふ

雄垂



小菅

小菅山権現の神祠は東嶺の中腹にあり是を奥の院と云里祠は小菅村にあり此邊淺葉野といふ和名抄武藏國入間郡に麻葉の地名あり又松本の北にも淺葉野といへる地あり小菅は神古菅に出たる名にや近來里祠に萬葉の人麿の歌を碑石に彫て立

萬葉卷三 淺葉野立神古菅根 誰故吾不戀

柿本人麿

社司傳記曰此御神は白鳳年中に諸人始て知る神跡は素戔鳴尊也其後役行者此所に來り熊野金峰白山山立山走湯戸隱等の神を併て八所権現と稱す後また行基菩薩參籠の事あり平城天皇大同元年北狄退治の御願として神地をよせられ社頭建立あり其後建久八年頼朝卿より庄園あまた寄附有近郷六ヶ所と云今に隣村に神戸の名残り小見の里は神地にあらすといへとも御神始此に至給ふ時彼里に休給ふとて今に御腰掛あり其後一字を立て加耶吉利堂といふ故に小見を結界の地とす合て七邑はすへて殺生を禁す又因縁ありて椿を栽る事を禁す奥院は別當大聖院元隆寺里祠は神主鷲尾氏六月四日より十一日まで其間市をなす諸所の商人輻輳農家をかりて器財衣服の舖を開けは日頃は寂々たる僻地も忽繁花の樹となり往還絡驛として雜沓は賑を播す地方官所よりは出張の有司幕の内に座して非常を改め其邊の山里又ハ遠く出羽奥州よりも賣馬多くひき連たりて交易賣買の聲甚賑しく恰も大都會の如し六月八日は相談日とて諸方の力者集ひ來り吾こそ今日の抽手よと肩いからし腕まくりして勇めるも又目覺し八月四日より安原寺村一の鳥居より三十七町の間七石八木と稱するあり

- 七石は 鏡石 船石 御座石 鏡石 尾張石 大黒石 隠石
- 八木は 五本杉 鞍掛松 鳥居杉 太平杉
- 連理松 腰掛松 實取松 乳木

此の乳木といふは銀杏にて一山を隔て神戸にあり希代の古樹也高さは餘木に秀るといへとも太きに應じては高からず圍は十一拱にあまり枝葉繁茂して枝ことに瘤の如きものを生す長く下り垂るは乳の如し故に乳木となつて其最長するものは地に入て丸き柱を立たることく地に肩たるは又枝葉を生す珍奇の神木也



神戸の乳木

四石

七卷村と東大瀧村の間千隈川端の石はみな石ことに窪みあり小なるは其邊の盟營にとり去て今は大石のみ残り其石胆



七卷村と東大瀧村の間千隈川端の石

曲して穴の通りたる数々窟みのあるもあり變化さま／＼

窪田氏は其地に近き故に種々の石を引故に庭を作る一として窟なきはなしいつれも珍石也

小見木鳥氏庭石  
神ノ窟石と  
名つく

七巻  
觀立堂庭石

中村川口氏  
手水鉢

藤澤窪田氏  
庭石



横四尺  
六尺

獅子石

此地の川向ひ西大瀧の藤澤龍津瀧の神祠の鳥井の通にあたりて千曲川の水中に獅子石あり早魃の年河水こと／＼く溜たる時ならてはみえず左右より向ひ合て頭目鼻口自然に獅子の勢を但金毛を生せざるのみ三十年に一度許見る事あり右色深碧也といへり

賈氏談録曰贊公平泉莊有獅子石其形宛如獅子首尾鼻眼皆全云々

秋山

笠作より九里余り南山中に入て秋山といふ地あり此所はいにしへの平家の落人隠れ住む所といふ西遊記に壽永年中平家の人々京都を落給ひ須磨の御城を義経に破られ又讃岐の八嶋の軍に打負終に長門國赤間か關の海中に一門殘らず入水し給ふと披露しその實は肥後の極山中に深く隠れ給ひ其後世は皆々源氏に歸して平家の人々永く山中の土とくら果給ひ其隠れ給ひし所肥後國今五ヶ村といふ年月はすてに四五百年か間て一向人間の通路たゞ果て居たりしか足利の末にや川上より梶の流來るをふと見付て此山奥に入住けるとしり漸く尋いりはしめて此世に通せりといへり此秋山も同く平家の餘黨この山中に忍ひ入しといふ其屋齋とて今に平の家を名頭につくるもの多し此 南は上野北へ越後の山々連りて何處よりも通路しかたく其作の下志久見の川を信越の分界とす又北越に清津川あり此兩川の中なる川を中津といふ源は何れも信濃より出る此川の兩端少しく窪みある地に家居す入口の屋敷と云所落人の初て住ところといへり是より次第に開墾して川上に上野原和山といへる村あり二里上りて暮山の南に温泉あり近き頃小庵を作りて湯本と云七八月の頃入浴の人あり故に通路を開きて漸く牛馬通ふといへとも甚峻岨の山路也川下に至りては小赤澤甘酒 秋山といふは四里程の間をすへ大赤澤此地より下は北越にて中平結東前倉今説てめ などのいへる村もありてともに秋山とよへり往古は穀もなく只菰藨のみ作りて其根を食せしよし今は山々の岨を火にて焼拂ひ粟稗蕎麥大豆等を作り又は枿の實を拾ひて食とす中にも粟を第一の食とす故にや正月七日には稗にて大なる男根の形を造り今年の粟は如斯と家毎に持行て祝言すといへり近き頃より女北越に倣ひて縋を業とす業より衣類はおろといふ物にて造る此物は山中に自然と生して芋の如し是を刈て日に晒し水につけて皮を剥小索にして

細に絹袖なき外套の如くにして表着とす老若男女襦子まで皆これを着る名つけてバタといふ多は衣服の上に着夏は襟形にこれはかり着る也



按にバタといふは巴且人の着る物に似たる故に號にや萬國新話に曰巴且大宛の南に當りて天然に近き島也延寶八年五月十七日の夜日向の國へ十八人乗の異國船漂ひ着たり夫より翌月十八日領主伊藤出雲守殿より崎陽へ送らる則領豪牛込忠左衛門殿唐紅毛の譯官をはしめあらゆる舌人に命せられて問せらるれと些も言語通せざる故に何國の人とも知れざりしか御藥苗木入役水野小左衛門と云もの才覺にてやうやく巴且人なる事知れたり衣類は日本の風呂敷の如し冷氣の脚に至り木綿布子をあたへられければ残らず綿を抜去り袖無の襦に制して着せしと也其圖をみるに秋山の人のバタを着たるに似たり

刀劍などには世に珍らしき物も有しかみ商人に價低く賣はらひしとなん小家は障子もなし藪を下て風を防く席は茅の如くなる物を編てしく也髪に油をぬる事なし帯は細きものを前にて結ふ男はたま／＼里にも出る故に詞も大抵違はされとも女同志の咄は急言にしてひと云へきをぶと謂きと云へきをちと云或人苗を多く採來りけるを見て是はいかなる苗そと問

柄木 若木 木 出 木 柄  
これはとちのわかちの木の根にてちたちのこたと云しとそ是を急言にいふ故に雀の囀か如し

又此地地瘠をいとふ事至て甚し里に瘡癩流行ときは商人修行者の類を入す是は毎家を問訊する者は其氣に染觸て來らん事を怖て也功德院定りたる寺有といへとも行程遅ければ冬月深雪の頃はさら也平日とても人死るときは僧を請するに及はず一室の内に往古より三幅の畫像ありて是を死人に殺するを引導誦經の代りとす此畫像一ツは彌陀佛一ツは聖德太子一ツは方官所の管内と成て箕作の村長奉て諸事を指揮すよろづおこそかなる事を望まされは求ること微し衣食事足りて恒に争ひ怒る事なく只質朴にして大古人の如しまことに世外の一世界也白氏文集に樂天か美みし朱陳村にも似たるへし但田なき故に米なし茶なき故に酒なきを不足とするのみ婚姻其外余儀なく酒を用ゆへき事の有ときは粟の體を造りて用ゆ又一月に一文の錢を神棚へ上る也小家一年に一二文を上る是は太神宮へ獻する也數十年に至り其數つもありて四五百文に滿るといへとも一錢も散らす伊勢の使ありといへとも 誦ては送らすたま／＼伊勢より神東廻村の事あれは男女つとひて珠數をつまくり合掌申廻して拜す直に太神宮に詣るのころとかや粟酒の盃をいた／＼く事を生涯の規模をする事也とそ 按に建仁元年越後にて城太郎資盛平氏の殘黨を招き鳥坂の城にたてこもり權て謀叛を企つ鎌倉より討手として佐々木盛綱入道馳向ひ合戦に及び給に鳥坂落城資盛遂電す其時忍ひ入しものとおぼへしに幽谷餘韻に秋山記ありて平勝秀と云者頼朝の爲に破れ上州草津より敗走して來るとあれは未詳

秋 山 記

千 丈 實 巖

信州高井郡有鳥甲山傳云往古法道仙人修練之地爲及後文治年間平勝秀爲頼朝破從上高草津望此山於西北敗走乃止其麓今之屋敷村乃其所棲遲處時其親戚近臣僅可十人潛跡竄伏今之秋山村即其裔胤也蓋勝秀以秋山爲氏故名其地乎其地有高倉山



越後謙信居春日山蠶食其地方若干里時秋山村人獲二鷹於高倉山以獻謙信謙信賞之爲除百石之租最後松平遠江刺史守飯山時信越有經界諍南北若干里東西若干里永爲信州之地距秋山村於北數里有箕作村總轄秋山諸村故謙信除書亦賜箕作彼官裁定經界後秋山諸村並爲箕作島田氏佃戶蓋島田氏祖嘗與秋山氏有婚姻誼是以變世屬之乎皆常慶院檀越而各平字冠名由先祖平氏也八十年前秋山出金島田氏以其命鑄鐘以尊常慶院今現存矣其後金斷而溫泉湧金氣也惜以其路險難會無遠人來浴今茲癸巳夏五月島田氏特白中野官衙蒙之允愈且得廳吏某氏陰助欲以闢一區勝地乃命力夫刺石突山以浚其泥且架數椽於巖巖間以使遊客特請藝師佛而造之堂號曰金峯山寶藏寺從此沿川而下纔一里所東崖有村名曰和山亦有溫泉俗云冷湯其性亦良也島田氏修之架屋構堂如秋山焉名曰和合山瑠璃光寺常慶抵書請有稱述余也未遊之境妄意思之如其所謂大倉嶽天巖助笠之勃地能々倉鉢保金池村名乎雁澤白澤作澤戰山等者山嶺奇秀固亡論也況復溫泉之凝滑也冷湯之清激也島甲之白巖也赤倉之丹崖也管神之祠也矢櫃之瀑也窟坑也風穴也雄龜也雌龜也官城秋山和山上原山村溪邑鮮少幽邃使不覺神馳魂飛安得身生羽翼一食頃周旋其地以一覽其千巖萬壑邪徒有老矣之歎而竊愧無神通遊戲探錫踏空之三昧耳 下略

山 蟹

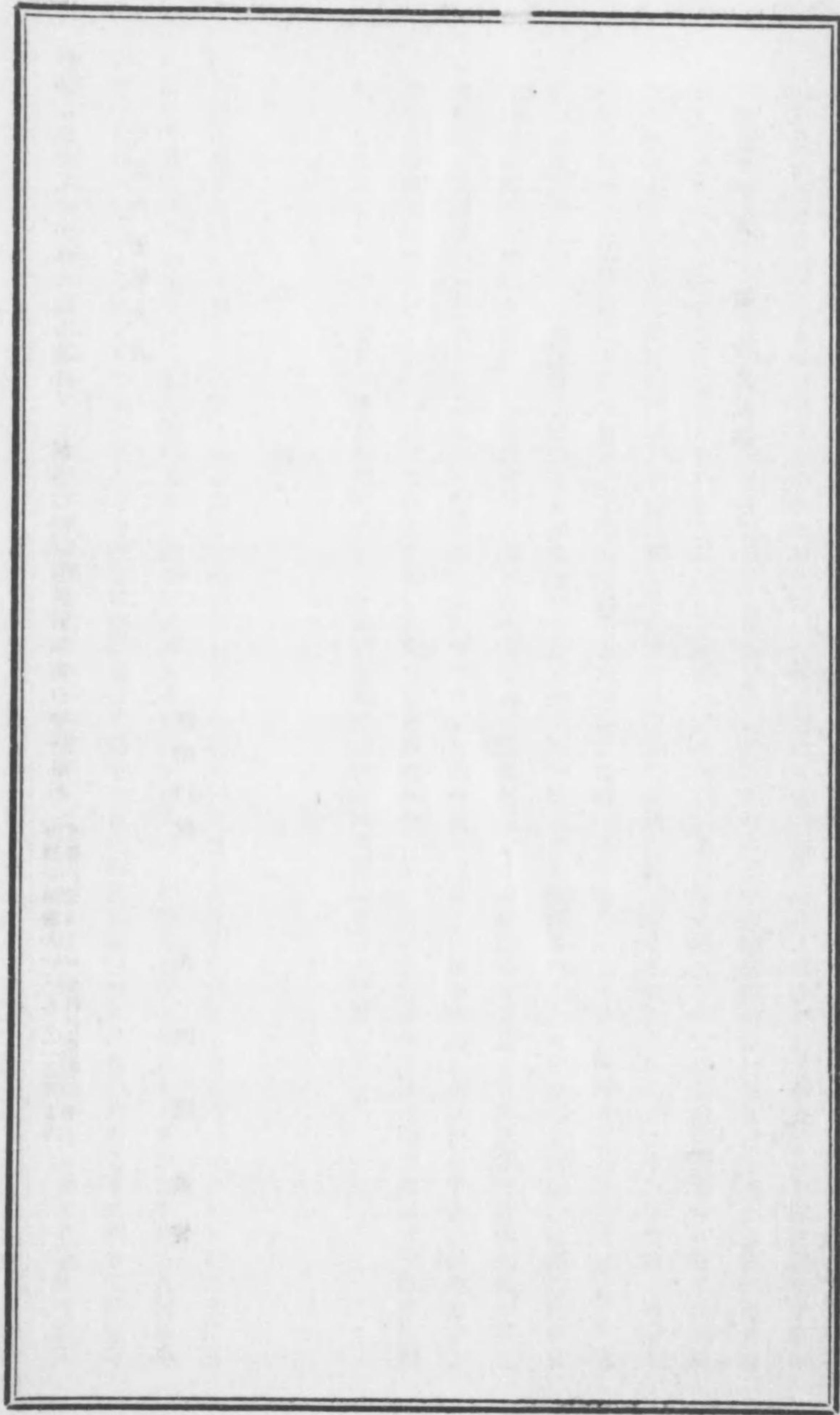
秋山の山深き山陰に大蟹あり山蟹といふ見し人の語りしとて中蛇の六尺はかりなるか頭を上ける事三尺はかり尾の方に三尺はかり曳て逸早く走り行くを山蟹の大きく登丈二尺はかりなるか雜木の上を飛鳥の如くかけりて追行さま見る人驚き身の毛いよたちしかさるにてもいかなることをなすに密に忍ひて跡をしたひ樹陰に窺ひ見れば巖の峙たる下に到りて蛇逃る事ならず遂に蟹に捕へらる蟹は一の狭にて蛇の頭をはさみ一の狭にて五寸はかりに狭切て喰ひしとなん是は北越にて數人

の語るを聞しに何れの説も違はずと洞源山の老僧祖裕和尚の物語也西國の澤蟹といへるも二三尺より丈餘に到るといへれば同物にや

天保六末年九月

信州白田 井 出 道 貞 著

信濃奇區一覽 卷之五終



昭和十五年二月二十日 印刷  
昭和十五年二月二十五日 發行

路原拾葉第十八輯奥付

非賣品

編輯者

長野縣上伊那郡伊那町大字伊那三三三七番地  
上伊那郡教育會

發行者

長野縣上伊那郡伊那町大字伊那三三三七番地  
上伊那郡教育會

代表者 伊藤泰輔

印刷者

長野縣諏訪郡川原村一〇一八六番地  
鮎澤二郎



發行所

合名會社 鮎澤

印刷所  
電話 四七二五七七番  
長野縣上伊那郡川原村一〇一八六番地

302  
198

終